大谷大学真宗総合研究所

研究所報

No.65　　2014. 11. 1.

目次

「建学の精神」教育推進研究が生みだしたもの 1
2013(平成25)年度「指定研究」等研究経過報告 2
2014(平成26)年度「指定・一般研究」等(廃止・変更・追加)研究組織一覧 9
2013(平成25)年度「一般研究」研究結果概要 11
海外学会参加報告 37
国内研究調査報告 40
公開講演会・公開研究会 42
共同研究調査報告 44
全国大学史資料協議会研究会報告 47
彙報 48

「建学の精神」教育推進研究が生みだしたもの

大谷大学長　草野顕之

真宗総合研究所が2011年に開所30周年を迎えたことを承けて、学長を研究代表者とする「特定研究」という新たな取り組みが始まった。私はその前年の2010年に学長職に就任していたが、就任一年を経た2011年に、この新たに始まる試みに取り組むこととなった。その時は、どういうテーマで行うのが、特定研究としてふさわしいのかと考えたが、ともかく初の試みであるから、私立学校の生命ともいうべき「建学の精神」を取り上げるのが当然であろうという結論にはすぐに達した。

ただ、学長が研究代表者になる研究班をつくるというお話しを聞いた時は、さて、日々の校務に追われて時間的余裕のない私に、研究班の代表を務める暇があるだろうか、と大変心配もした。しかし、それも研究員のチーフを引き受けて下さった木越康先生の積極的な関わりによって、研究員の各先生方がそれぞれの立場から、この課題に真剣に取り組んでいただいたことで、杞憂に終わった。研究員の先生方には本当に感謝している。

一年目の2011年度は幾度かの研究会がもたれて、大谷大学が「建学の精神」をあらわす言葉として大事にしている清沢満之氏の「開校の辞」と、佐々木月樵氏の「大谷大学樹立の精神」の語られた時代的・社会的背景を知るとともに、どのようにしてこの二つの言葉が「建学の精神」として位置づけられたのか、という基礎的な検証が続けられた。

その一つの成果として、木越先生と西本祐攝先生が、第23代学長の寺川俊昭先生宅を訪問し、背景には第20代学長の松原祐善先生の強い思いがあった、という事実を寺川先生から聞き取って下さったのは貴重な成果であった。

二年目の2012年には、先の課題を引き続き検証しながらも、次第にこの研究班の目的の一つである「建学の精神」の現代的表現ということと、大谷大学の宗教教育また自校教育の科目でもある人間学Ⅰの共通資料集作りという課題に視点が移っていった。そして、人間学Ⅰの全般にわたる共通資料の作成はひとまずおき、建学の精神を代表する清沢「開校の辞」、佐々木「樹立の精神」に特化したテキスト作りを目指すこととなった。

そのテキストは、二つの言葉の原文を紹介することは勿論であるが、その英訳を提示するとともに、それを日本語に再翻訳した文章を載せることで、現代の学生が理解しやすい文章として表現することとなった。さらに、英訳と再翻訳とを見開き左右の頁に配置することで、英語を通して建学の精神を学んでみたいという人にも対応するというユニークな編輯がなされている。

最終年度である2013年は、そういう内容をもつテキスト作りに研究活動のほとんどを費やして、2014年３月31日の奥付をもつ『大谷大学で学ぶ―建学の精神―』という冊子が誕生した。

当初は有志の方が人間学Ⅰの授業のなかで利用してみて、さらに改訂を加えていこうとの意向であったようだが、結局、全ての人間学Ⅰのコマで利用していただく事になり、このテキストは誕生するや、直ちに大谷大学の建学の精神を学ぶ教科書という大きな役割を果たすこととなった。

冒頭記したように、研究代表者は十分この研究班に関わることができなかったが、研究員の方々のご尽力により、この特定研究が素晴らしい成果をあげたことに満足している。改めて、厚く御礼を申し上げる次第である。

2013(平成25)年度「指定研究」等研究経過報告

「建学の精神」教育推進研究

大谷大学建学の精神の具現化

研究代表者・学長　草野 顕之
（日本仏教史学）

本研究では、「建学の精神」の具現化を課題とし、以下３つの視点から研究を推進している。

①「建学の精神」の現代的表現化
②「人間学Ⅰ」の共通資料集の作成
③「建学の精神」を活かした学科教育の在り方

「建学の精神」とは、直接には大谷大学初代学長清沢満之による「開校の辞」（明治34年、移転開校式）と第３代学長佐々木月樵による「大谷大学樹立の精神」（大正14年入学者宣誓式訓辞）を指す。

研究の視点①では、本学が今日まで教育の根幹に据えてきた両学長の訓辞の意義を再確認し、これを現代的形で表現していくことを目指している。両訓辞は、それぞれ「私立学校令（明治32年公布）」と「大学令（大正7年公布）」における宗教教育に対する厳しい制約のもとで公開されたものである。そのような当時の歴史的状況を加味したうえで両訓辞の持つ意義を再検証するための研究を重ね、その精神が持つ現代的意義の確認と表現を含めた具現化の問題について検討した。

視点②では、本学の「建学の精神」に基づく教育を最も体現する科目である「人間学Ⅰ（文学部）」あるいは「仏教と人間Ⅰ（短期大学部）」に関して、教育の基礎となる共通資料の作成に向けた検討が期待された。当初は「人間学」における仏教教育全般にわたる共通資料の作成が目指されたが、焦点を絞り、「建学の精神」に特化したテキストを作成する方向で検討を進め、上記①の研究内容を踏まえ、学生のみならず、教職員が共通に「建学の理念」を学ぶことができるような基本テキストの作成を行った。

視点③は、以上の①および②での成果を踏まえ、大谷大学の建学の精神と各学科における教育との連関について検討作業をおこなうことを目指したが、この件については未着手である。

本年度は、主に視点②における「建学の精神」基本テキストの作成に向けた検討と編集作業を重ね、年度末の刊行を実現した。

【テキストの狙いと構成】

[狙い]

①大谷大学の学生ならびに教職員間で、「建学の精神」についての理解を共有することを目的とする。

②大谷大学における「学び」に対して各人が共通の目的意識を持ちながら、それぞれの分野において主体的に取り組むことができる環境を構築する礎とする。

清沢満之の「真宗大学開校の辞」と佐々木月樵「大谷大学樹立の精神」が、大谷大学の「建学の精神」を最もよく表現したものであるという認識に立ち、両訓示に対する理解を深めることによって、上記の目的を果たしていく。

新入生および新任教職員学習用テキストとして作成するが、作成初年度については全学で共有できる機会を設けることが望ましい。新入生については、「人間学Ⅰ」及び「仏教と人間Ⅰ」の授業で使用することとし、90分２コマ分の分量を想定して作成した。

これまで「建学の精神」に直接的に触れる機会がほとんどないままに卒業していく学生たちに、両訓示を通して大谷大学の「建学の精神」に触れてもらえる機会とする。したがって、単なる大学史の紹介や学習ではなく、歴史を通して先人が求めてきた「精神」開発の内容について、考えてもらう機会とする。

[構成]

はじめに／大谷大学のあゆみ／「建学の精神」を学ぶにあたって／真宗大学開校の辞（原文・語注・解説）／大谷大学樹立の精神（原文・語注・解説）／真宗大学開校の辞（英訳・現代語訳）／大谷大学樹立の精神（英訳、現代語訳）／略歴（清沢満之・佐々木月樵）／年表（総頁数31頁）

2014年度は、実験的に数クラスでテキストを使用し、修正・ブラッシュアップしたものを2015年度以降、全学的に使用する。

国際仏教研究

諸外国における仏教研究の動向の把握と資料の収集・整理・公開

研究代表者・准教授　井上 尚実
（真宗学）

本研究は、諸外国における仏教を中心とした宗教研究の動向を把握するとともに、国際社会に対して本学の真宗・仏教研究を公開することを目的としている。本年度も英米班、ドイツ・フランス班・東アジア班・ベトナム班の四班に分かれて研究活動を進めてきた。各班の研究成果の概要は以下の通りである。

〈英米班〉

Ⅰ．翻訳研究活動

(1)次期翻訳研究プロジェクトの計画

短期プロジェクトとして４年間取り組んだ佐々木月樵「大谷大学樹立の精神」の英訳が、2012年度末に研究所の『研究紀要』第30号に掲載された（pp.1-31）。今年度は、次期翻訳研究プロジェクトの計画に入り、カリフォルニア大学バークレー校のマーク・ブラム教授（英米班嘱託研究員）やオバーリン大学のジェームズ・ドビンズ教授とも相談しながら、中長期的に英訳研究に取り組むべき真宗関係テキスト選定を進めた。英米班の今後の体制や他の研究プロジェクトとも関係することなので、最終的な決定は2014年度に持ち越すことになった。

(2)『浄土の真宗』『宗門の歩み』英訳出版への協力

阿満道尋嘱託研究員（アラスカ大学アンカレッジ校准教授）を中心に、真宗大谷派北米開教区真宗センターから出版予定の教師課程教科書『浄土の真宗』『宗門の歩み』の英訳について、翻訳チェックと編集校正に協力することになり、初年度は６月27日と７月５日に研究会を開き、現状と出版までの作業について確認して計画を立てて作業に入った。

Ⅱ．国際学会・シンポジウム関係

(1)第16回国際真宗学会（IASBS）大会

５月31日㈮～６月２日㈰の３日間、カナダのバンクーバー市、ブリティッシュ・コロンビア大学で開催された学会大会に参加し、英米班を中心に企画した大谷大学・龍谷大学合同パネルで“Original Features in Shinran's Pure Land Thought: Focusing on His Elucidation of Faith and Realization”（親鸞の浄土思想の特質―その信と証の解明に注目して―）というテーマの研究発表を行なった。マイケル・コンウェイ嘱託研究員（司会）、嵩満也教授（龍谷大学）、木越康教授（特別招聘者）、那須英勝教授（龍谷大学）、井上尚実研究員、ゲイレン・アムシュタッツ博士（特別招聘者、応答者）の７名で構成されたパネルの詳細については『研究所報』第63号に掲載された木越教授による学会参加報告を参照。

なお、マーク・ブラム嘱託研究員（カリフォルニア大学バークレー校）、阿満道尋嘱託研究員（アラスカ大学アンカレッジ校）、マイケル・コンウェイ嘱託研究員は、それぞれ以下のような個人研究発表を行なった。

Mark L. Blum, “Centering the Marginal: The Role of *Bessho* and *Sanjo* in the Spread of Nenbutsu”

Ama Michihiro, “Buddhist Confession in Modern Japan”

Michael Conway, “A Transformative Expression: The Role of the Name of Amituo Buddha in Daochuo's Soteriology”

(2)ELTE東アジア研究所と共催の国際シンポジウムを開催

10月26日㈯・27日㈰、ハンガリーの学術提携校エトヴェシ・ロラーンド大学（Eötvös Loránd University, ELTE）を会場に開催された大谷大学真宗総合研究所・ELTE東アジア研究所共催の国際シンポジウム「仏教における信」（Faith in Buddhism）に参加した。英米班を中心に企画してロバート・F・ローズ教授、藤嶽明信教授、織田顕祐教授、井上尚実研究員、マイケル・コンウェイ嘱託研究員の５名が以下の研究発表を行なった。

織田顕裕「『大乗起信論』における「信」の概念」

藤嶽明信「親鸞が明らかにした信心―如来回向の信心―」

Robert F. Rhodes, “Faith and Practice in Genshin's *Ōjōyōshū*”

Takami Inoue, “Genealogy of Other-Power Faith: From Śākyamuni to Shinran”

Michael Conway, “Dharmākara as the Subject, Not Object, of Faith: The Reinterpretation of Amida's Causal Phase in Modern Shin Thought

公募によって選ばれた博士課程学生２名（仏教文化D2李曼寧・仏教学D1竹林遊）も７月２日、８月１日、９月30日に開かれた事前研究会から参加し、シンポジウムに同行してELTEの研究者や博士課程学生と学術交流

を行なった。シンポジウムの発表論文はELTE東アジア研究所発行のBudapest Monographs in East Asian Studiesの１冊として2014年度中に出版される。

他にアメリカ宗教学会（AAR）年次大会（11月22日～25日、ボルティモア）への参加も予定していたが、日程の都合で今年度も参加できなかった。

(3)シンポジウム開催の準備

・*Cultivating Spirituality: A Modern Shin Buddhist Anthology*出版記念シンポジウム

アンソロジー英訳の出版を記念した近代教学をテーマとするシンポジウムを大谷大学で開催する計画を進めた。編集を担当したマーク・ブラム教授（嘱託研究員）、ロバートF. ローズ教授に加えてオバーリン大学のジェームズ・ドビンズ教授らとミーティングを行い、開催時期については2015年度の前期、６月26㈮・27㈯の両日とする方向で、主たる招待予定者に参加打診を始めた。

Ⅲ．公開講演会の開催

今年度は以下のような２回（３人の研究者）の公開講演会を開催した。

(1)2013年７月１日㈪　16：20～17：50

講師：阿満道尋氏
（アラスカ州立大学アンカレッジ校准教授）

講題：真宗大谷派おける北米開教の現状について

会場：響流館３階　マルチメディア演習室

(2)2014年１月20日㈪　16：20～18：00

テーマ「日本仏教とグローバル化」

講師１：James Mark Shields ジェームズ・マーク・シールズ氏（バックネル大学准教授）

講　題："Warp and Woof: Meiji New Buddhism as a Response to Globalization"
（経と緯：グローバル化への対応としての明治新仏教）

講師２：Ugo Dessiウーゴ・デッスィー氏（ライプツィヒ大学宗教研究所講師）

講　題："Japanese Buddhism and Globalization: A Multidimensional Approach"
（日本仏教とグローバリゼーション：多面的なアプローチ）

会　場：響流館３階　マルチメディア演習室

Ⅳ．その他

国際研が収集してきた未整理の図書の整理・公開については、今年度は仏教学関係のデータ・ベースを扱える松下俊英嘱託研究員に担当してもらって作業を進めた。研究所に所蔵されている欧文仏教雑誌とデータ・ベースを照合し、欠本や図書館で継続購入している雑誌との重複などについてある程度整理がついた。

〈ドイツ・フランス班〉

Ⅰ．学会参加・研究発表

◇「第23回世界哲学会議」参加報告

2013年８月４日から10日まで、ギリシアのアテネ大学において第23回世界哲学会議（XXIII World Congress of Philosophy）が開催された。国際仏教研究からは藤枝真研究員（本学准教授）とMichael J. Conway嘱託研究員（本学非常勤講師）が参加し、研究発表をした。

大会初日の４日㈰には、藤枝研究員が発表する「生命倫理（Bioethics）」の部会が開かれた。

藤枝真「世俗と宗教のはざまで：臓器移植に関する公的議論における日本仏教」

６日㈫にはConway嘱託研究員が発表する「仏教哲学（Buddhist philosophy）」の部会が開かれた。

Michael J. Conway「道綽における末法の意義」

９日㈮には、藤枝研究員が発表する部会が開かれた。このラウンドテーブルは、キルケゴール生誕200周年を記念するものであり、午前に一つ、午後に二つのラウンドテーブルが行われた。

Kierkegaard's Relation to Greek philosophy, religion and culture

藤枝真「市中の哲学：キルケゴールの"public"の概念に関する社会・政治的読解」

Ⅱ．研究者との交流・調査について

上記の大会の後に、デンマークの宗教学・仏教学研究者と交流し、またデンマーク王立図書館での情報収集を行った。今回お話ししたエスベン・アンドレアセン（Esben Andreasen）氏は、仏教研究・翻訳や、日本・中国の宗教研究をデンマーク語や英語で多数出版している。真宗総合研究所に客員研究員として滞在していたこともある研究者である。今回はとくに、現代のデンマーク社会における葬送観・死生観についてお話をうかがった。

Ⅲ．シンポジウム論文集の刊行

2010年にフランス国立高等研究院においておこなわれたシンポジウム「フランスと日本におけるナショナル・アイデンティティと宗教」での発表原稿を論文化したものについて、その刊行準備が進められている。2014年度にフランスのBrepols Editionsから、Sciences des Religionsシリーズの一冊として出版される予定である。

Ⅳ．翻訳

マールブルク大学神学部ディートリッヒ・コルシュ

教授の著書*Martin Luther: Eine Einführung,* Zweite Auflage（『マルティン・ルター入門』第２版）の翻訳が完了している。訳文の検討が終了次第、出版を計画している。

〈東アジア班〉

Ⅰ．中国社会科学院歴史研究所との共同研究

中国社会科学院歴史研究所とは2010年に学術交流協定を締結し、共同研究「中国華北・東北・東部モンゴル地域の宗教と文化」をテーマとして研究活動を推進してきた。本年度は４年目に当たり、先方から２名が本研究所を招聘、本研究所から２名を先方へ派遣し、共同研究を行い、学術交流を深めた。また、今後の交流に関する協議も行った。

(1)2013年12月３日(火)～12月９日(月)、王震中研究員・関樹東副研究員の２名を招聘し、本学にて研究活動を行い、公開研究会を開催した。

12月６日(金)　午後４時～６時

マルチメディア演習室（響流館３Ｆ）

○中国の国家の起源と発展についての研究の最新進展　王震中

○耶律和魯斡、耶律淳父子と遼東の政治　関樹東

(2)2014年３月３日(月)～３月６日(木)、福島重非常勤講師、今西智久任期制助教が、中国社会科学院歴史研究所を訪問し、研究発表を行う。

○関于奴児干永寧寺的設置和意義－以14～15世紀中国東北仏教史的究明為目標　福島重

○関于中国中古的沙門観及沙門致拝君親－隋煬帝期的礼敬問題為主　今西智久

Ⅱ．公開講演会の開催

京都大学人文科学研究所に訪問研究員として滞在中の朱玉麒氏（北京大学歴史学部及び中国古代史研究中心研究員）を講師として招聘し、本学博物館所蔵の大谷瑩誠蒐集「蒙古古石梵經硯」に関する公開講演会を開催した。

２月10日(月)　午後３時30分～５時30分

マルチメディア演習室（響流館３Ｆ）

○大谷大学博物館所蔵「蒙古古石梵經硯」を巡って　朱玉麒

〈ベトナム班〉

本学真宗総合研究所は、2013年12月25日にベトナム社会科学アカデミー宗教研究院との間に学術交流に関する協定書を交わし、正式に共同研究を開始することとなった。この協定締結に前後して、相互に研究機関を訪問し共同研究の可能性を探ってきた。その結果締結したこの協定は、仏教の共同研究についての包括的取り決めであり、具体的な研究の推進は別途覚書を交わし、それに沿って推進することとなっている。このような事情で、真宗総合研究所国際仏教研究のなかにベトナム班を設置し、本格的に研究を開始する準備を進めてきた。当該期間中、研究の最初の段階として着手しなければならない点を整理し、具体的な研究方針について検討した。

2013年６月３日(月)～７日(金)

共同研究の協定締結に先立ち、ベトナム社会科学アカデミー宗教研究院院長グェン・クォック・トゥアン氏が、同宗教研究院客員研究員の大西和彦氏と共に学術交流を目的として来訪された。今後の学術交流の可能性について意見交換がなされた。本学が受けたこの表敬訪問を意義深いこととして記す。

2013年９月24日(火)～29日(日)

同宗教研究院副院長チュー・ヴァン・トゥアン氏ら五名の社会科学院の研究員が大西和彦氏と共に来訪された。宗教研究院と真宗総合研究所国際仏教研究ベトナム班との共同研究の実際について意見交換した。とくに『越日仏教辞典』（仮称）編纂について議論した。

2014年３月６日(木)～３月10日(月)

織田顕祐（教授）と箕浦暁雄（准教授）は、ハノイのベトナム社会科学アカデミー宗教研究院を訪問した。主たる目的は『越日仏教辞典』の編纂計画について協議することにあった。結果、『越日仏教辞典』編纂に先立つ基礎作業として、日本語で読める『ベトナム仏教概説』（仮称）、ベトナム語で読める『日本仏教概説』（仮称）の編纂の可能性について議論した。帰国後『日本仏教概説』編纂方針について具体的な検討を開始した。ベトナム人研究者にとって、『日本仏教概説』が日本仏教研究を本格的に開始するための道標となることを願ってのことである。他方、我々にとって、『ベトナム仏教概説』がベトナム仏教研究を大きく推進させる出発点となることを願ってのことである。

また、滞在中にいくつかの寺院や博物館を視察した。とくにバクザン省ビンギェム寺（永厳寺）に保管されている仏典の版木を視察するとともに、その資料的価値について宗教研究院のトゥアン院長をはじめ研究員の方々と意見交換した。

西蔵文献研究

チベット語文献及びパーリ語貝葉写本のデータベース化

研究代表者・教授　福田 洋一
（仏教学）

1．チベット語文献の電子テキスト化

ツァンナクパ（12世紀）が著したダルマキールティ著『量決択』の注釈書（大谷蔵外 No. 13971）の電子テクストについて校訂・編集作業を進め、第二章までを公開した。

『サンプ明鏡史』（大谷蔵外 No. 13981）については、西沢史仁（嘱託研究員）が校訂テキストと和訳を作成し、研究会を開催して検討をした。その成果は、来年度（2014年度）刊行予定。

『倶舎論語義解明・善説の陽光』（藏外No. 13972）の電子テキスト入力を終了し、公開した。

2．北京版チベット大蔵経の写真撮影とネット上での公開方法の検討

北京版チベット大蔵経の写真撮影については、その方法等を班内で検討した。

3．パーリ語貝葉写本のデジタル化

清水洋平（嘱託研究員）と舟橋智哉氏により大谷大学図書館藏稀覯写本『*Mahābuddhaguṇanvāta aṭṭhakathā*』のクメール文字からローマ字への転写が完了し、成果を本研究所『研究紀要』31号に掲載した。

大谷大学所蔵のパーリ語貝葉写本の来歴に関連のあると思われる13世紀のクメール文字パーリ語貝葉写本（長崎県平戸市）について、清水が３月12日～３月14日に調査を行った。また、清水は３月16日～３月22日の日程で、タイのバンコクにて稀覯写本の調査を行った。

4．寺本婉雅の日記の翻刻

村岡家所蔵・寺本婉雅関連資料に含まれる寺本婉雅の日記のうち、1899. 9. 1～1900. 12. 31［最終記事は1900. 7. 27］間の日記『新旧年月事記』の翻刻が終了した。翻刻は高本康子（嘱託研究員）が担当し、難読箇所については三宅伸一郎（研究員）とともに現物を確認し、確定作業をおこなった。その成果は、解題を付して本研究所『研究紀要』31号に掲載した。

5．海外の研究者、研究機関との交流

2013年7月1日にモンゴル国立大学社会科学部との間で締結された学術交流協定に基づき、共同研究「モンゴルにおける仏教の後期発展期（13世紀～17世紀）の仏教寺院の考古学・歴史学・宗教学的研究」を開始した。今年度は、松川節（研究員）、武田和哉（嘱託研究員）、三宅伸一郎が参加して、８月７日～８月16日に、モンゴル国のスム・フフ・ブルド寺址、ホグノ・タルニィン・オブゴン寺址、ハル・バルガス遺蹟、ノゴーン・バルガス遺蹟、ハルボハ都城址の共同調査を行った。松川は本研究所『所報』No. 63にその報告を掲載した。

７月21日～27日にモンゴル国立大学で開催された第13回国際チベット学会に、松川節と三宅伸一郎が参加した。松川はモンゴル語で「エルデネ＝ゾー寺院出土考古遺物と歴史史料の統合によるモンゴル仏教史構築への新たな展望」、三宅はチベット語で「アムド・マーヤン寺のラマとキリスト教宣教師ポルヘルとの宗教議論について」と題した発表を行った。参加報告は、三宅が本研究所『所報』No. 63に掲載した。

７月２日～７月８日にポルトガルのリスボンで開催された第5回ヨーロッパ東南アジア学会議に清水洋平が参加し、写本などの第一次資料の研究をテーマにしたパネル（Panel 95: Digging up Hidden Sources: The Changing Roles of Libraries and Archives in Southeast Asian Studies）において、「Importance of Primary Source Materials: With a Special Reference to the Buddhist Manuscripts of Thailand」と題した研究発表を行った。

また、海外のチベット学研究者を招いて以下の公開研究会を開催した。

(1)６月18日㈫　「歴代アジャ・リンポチェの事績について」講師：アジャ・リンポチェ（チベット・モンゴル仏教文化センター・センター長／元クンブム大僧院僧院長）［講演内容は、三宅伸一郎が『大谷大学真宗総合研究所研究所報』No. 63（pp. 47-48）において報告］

(2)６月26日㈬　「モンゴルにおけるチベット研究の歴史と現状」講師：M. ガントヤー博士（モンゴル国立大学社会科学部宗教研究学科長）［松川節訳の講演原稿を本研究所『研究紀要』31号に掲載］

(3)12月19日㈭　「ポン教聖地の現状について」講師：ツルティム・テンジン師（ティテン・ノルブツェ僧院瞑想学堂学堂長）

(4)３月７日㈮　「モンゴルの仏教文献：ガンダン寺所蔵チベット語文献の概要」N. アムガラン氏（モンゴ

ル国ガンダン寺学術文化研究所）

大谷大学史資料室

大学史関係資料の収集・整理

室長・准教授　藤田 義孝
（フランス文学）

大谷大学史資料室の主な業務は、年史編纂を目的とした大学に関する史資料の収集、整理、保存、公開である。現在は所蔵資料の公開に重きを置き、図書館1階エントランスにおけるスポット展示の開催や、武田武麻呂先生（元大谷大学教授）から寄贈された資料の整理、当資料室所蔵のフィルム資料のデジタルデータ化を行っている。旧「近代史研究班」が西方寺等で撮影したフィルムや旧「学事史研究班」の撮影フィルムはデジタルデータ化を終了したので、今後は未整理のフィルムの把握とデータ化、およびデータ化が終了したフィルムから随時目録作成を進めている。

また、スポット展示では、真宗大学が巣鴨で開校した1901年（明治34）にスポットを当てた「大谷大学 in Tokyo」展と、赤レンガ100周年記念として、京都に移転した1913年（大正２）にスポットを当てた「100年前の大谷大学」展を開催した。これらの展示を通して、当資料室所蔵資料を広く公開していくと同時に、自校史教育の役割を担うことができればと考えている。

他大学における大学史への取り組みを参考にするため、全国大学史資料協議会の研究会にも参加した。10月９日から11日まで明治大学・国立公文書館にて全国大学史資料協議会2013年度総会ならびに全国研究会が「大学史資料の活用と展示」をテーマに開催され、当資料室からも参加者を派遣した。また、12月４日にエル・大阪（大阪府立労働センター）にて開催された西日本部会第４回研究会では、谷合佳代子氏が「MLA融合型図書館の活動」という題で講演し、その後、千本沢子氏の解説によるエル・ライブラリー（大阪産業労働資料館）の閲覧室や書庫、三池炭鉱灰じん爆発50年展「むかし炭鉱、いま原発」の見学が行われた。

さらに、現状において当資料室には業務を進める上での情報やノウハウの蓄積が不十分であるため、３月26日に大畑博嗣氏（大東市立歴史民俗資料館学芸員・元大谷大学真宗総合研究所研究補助員）を講師に招き、「大谷大学史資料室の変遷と大学史関係史料の整理・保存について」と題した公開研究会を開催した。

東本願寺海外布教資料室

大谷大学図書館所蔵「東本願寺旧蔵資料」海外布教関係部分の整理

室長・教授　桂華 淳祥
（東洋史学）

大谷大学図書館所蔵「東本願寺旧蔵資料」に含まれる海外布教関係部分は、おもに20世紀前半における東本願寺の海外布教に関する公文書の綴りで、当時の海外布教の実態を伝える貴重な資料である。この未整理の資料を整理して「資料一覧」を作成するとともに、資料自体を適正な形態にまとめて保存することを目的とする本資料室では昨年度に引き続き次のような活動を行っている。

資料には１～165の仮番号を付しているが、その１～18（満洲部分、2008年真宗総合研究所紀要掲載部分：旧一覧）のすべてのデータを新形式一覧へ移行する作業を行う。また新形式一覧には項目として設けられているが、旧一覧には記載のない法量などの調査も継続中である。それ以降の番号のものについては新一覧の形式に従って順次整理作業を進めており、現在は仮番号50～59・80～166に着手している。ちなみに新形式一覧とは、後世、他の機関との情報共有をより円滑にするために従来の資料一覧の体裁を変更したものである。

また本資料整理の補助作業として、これら資料の記事と対比しての確認あるいは補足をするために『宗門開教年表』（真宗大谷派宗務所　1969）所載の記事を基礎データとして入力し、さらに東本願寺の機関誌（『真宗』『宗報』など）の関係記事も抽出している。これについては明治・大正期を終了し、昭和期に至っている。

デジタル・アーカイブ資料室

大谷大学所蔵貴重資料のデジタル・アーカイブ構築

室長・准教授　藤田 義孝
（フランス文学）

本学に所蔵された多くの貴重な文献資料を半永久的に保存し活用していくため、資料をデジタル・データ化し、分類整理・保存する作業を引き続き進めていく。

その一環として、2010年度から継続中の、本学図書館所蔵古典籍を書誌データベースとして登録する作業を行い、2013年度には2,316件のデジタル・アーカイブ化を進めた。

また、大谷大学の学内学会による様々な学術刊行物をデジタル化して公開する課題について、2013年度には具体的な検討や作業に着手できなかったが、今後、多くの学内学会の事務局・資料置き場となっている１号館の立て替え計画に伴って学内学会と連絡を取る必要があるため、その機会を利用して、学会誌のデジタル化と公開状況に関する情報収集ができるであろう。

2014(平成26)年度「指定・一般研究」等(廃止・変更・追加)研究組織一覧

■「一般研究」黒澤班の廃止（2014年9月30日付）

名　称	研究課題及び研究組織	
【2014～2016年度「科研費」採択】 一般研究（黒澤班）	研究課題	保育カンファレンスが保育者の「同僚性」に与える効果の縦断的追跡研究
	研究代表者	黒澤祐介（本学非常勤講師・特別研究員）

■「指定研究」国際仏教研究の組織変更（2014年10月1日付）

研究名	研究課題及び研究組織	
国際仏教研究	研究課題	諸外国における仏教研究の動向の把握と資料の収集・整理・公開
	研究代表者	井上尚実
	研究員	井上尚実（准教授・真宗学）
		Robert F. Rhodes（教授・仏教学）
		新田智通（講師・仏教学）
		藤枝　真（准教授・宗教学・哲学）
		松浦典弘（准教授・東洋史学）
	嘱託研究員	James C. Dobbins（本学客員研究員・オバーリン大学教授）
		Mark L. Blum（カリフォルニア大学バークレー校教授）
		Paul Watt（早稲田大学留学センター教授）
		羽田信生（毎田周一センター所長）
		阿満道尋（アラスカ州立大学アンカレッジ校准教授）
		Michael J. Conway（本学非常勤講師）
		Michael Pye（マールブルク大学名誉教授）
	研究補助員（RA）	梶　哲也（博士後期課程第1学年）
	（RA）	味村考祐（博士後期課程第3学年）〈新規採用〉
	（RA）	尾﨑俊文（博士後期課程第3学年）

※下線は新規。研究補助員（RA）の林　研は、2014年9月30日付で解嘱。

■「指定研究」ベトナム仏教研究（追加）（2014年10月1日付）

名　称	研究課題及び研究組織	
ベトナム仏教研究	研究課題	ベトナム社会科学アカデミー宗教研究院との共同研究（仮）
	研究代表者	織田顕祐
	研究員	織田顕祐（教授・仏教学）
		浅見直一郎（教授・東洋史学）
		箕浦暁雄（准教授・仏教学）
	嘱託研究員	桃木至朗（大阪大学教授）
		大西和彦（本学客員研究員・ベトナム社会科学アカデミー宗教研究院客員研究員）
		福島　重（本学非常勤講師）

■「指定研究」嘱託研究員の所属変更（2014年10月1日付）

所属名	研究員名		旧所属名
真宗総合研究所	嘱託研究員	白館戒雲（本学名誉教授・特別研究員）	西蔵文献研究
		デルゲルジャルガル（モンゴル国立大学社会科学部歴史学科長・准教授）	
		清水洋平（本学非常勤講師・特別研究員）	
		石田尚敬（東京大学大学院人文社会系研究科特任研究員）	
		髙本康子（北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター学術研究員）	
		西沢史仁（東京大学大学院人文社会系研究科研究員）	
		伴真一朗（博士後期課程修了）	
		舟橋智哉（博士後期課程修了）	

■「指定研究」研究補助員の所属変更（2014年10月１日付）

所　属　名	研　究　員　名	旧所属名
国際仏教研究	研究補助員（RA）　LAMAO ZHUOMA（博士後期課程第２学年）（拉毛卓瑪）	西蔵文献研究

■「資料室」研究補助員の所属変更（2014年10月１日付）

所　属　名	研　究　員　名	旧所属名
大谷大学史資料室	研究補助員（RA）　渡邊 温子（博士後期課程第３学年）	西蔵文献研究

2013(平成25)年度「一般研究」研究結果概要

共同研究

新出土仏教遺物と文献史料の統合による13～17世紀北アジア史の再構築

研究代表者・教授　松川　節
(モンゴル学)

本研究は、モンゴル高原のオルホン河・トーラ河流域を調査対象域とし、新たに出土・発現した13世紀～17世紀までの仏教遺跡や文字資料が、従来の文献学的歴史研究といかに整合性を持つか、また統合可能かを明らかにしつつ、仏教をキーワードとして浮かび上がる北アジア史の新たな地平を追究することを目的としており、二年目に当たる今年度は、13・14世紀カラコルムの仏教寺院から出土した遺物を調査・研究するために、現地における本調査（2013年4月26日～5月8日、8月30日～9月13日、11月8日～13日）を行った。その成果は、2013年11月23日、2014年3月7日にそれぞれ大谷大学で開催された研究集会にて報告され、1）エルデニゾー寺院内における小規模な発掘調査の結果、モンゴル帝国時代～元朝期に築かれていた建造物の規模と構造については、一定の結論を出すには未だ至っておらず、なお検討の余地があること、2）カラコルム遺蹟の興元閣址発掘現場における観察により、モンゴル・ドイツ隊が公表している興元閣建築の編年については再検討が必要であること、3）ガンダン寺及びモンゴル国立公文書館所蔵資料の解読により、16・17世紀モンゴル仏教に関する考古学的知見と整合性を持つ歴史事実が浮かび上がってきたこと、以上の成果を得た。その意義・重要性は、従来、ほとんど研究されてこなかった16・17世紀モンゴル高原における仏教伝播の状況について、考古学的証拠及び文献資料を融合することによって再構築するための基盤を確保し得た点にある。

今年度は、2012年度に行う予定であったが許可を得られず今年度に延期していた現地発掘を成功裡に行うことができた。また、考古学的発掘によって得られた成果を仏教文献・公文書館資料と比較研究することにより、16・17世紀のモンゴル仏教の歴史的状況について新たな知見を得ることができたため、研究計画はおおむね順調に進展していると言える。

また、研究成果の地域還元をはかるため、モンゴル語による学術雑誌『オルホン渓谷遺産』第2号を2012年度中に発刊する予定であったが諸般の事情で延期していた。これを2013年6月に刊行した。

今後の推進方策としては、本研究課題の最終目的である「北アジア仏教史の再構築」を達成するため、9月中旬に国際シンポジウムを現地カラコルム博物館で開催し、会期に合わせてシンポジウム論文集（英文）一冊を刊行し、さらに関連資料集の電子ファイルでの公開を推進する。

共同研究

デジタルアーカイブ技術による契丹国の歴史考古言語資料の復原的研究と集成

研究代表者・准教授　武田 和哉
(歴史学・考古学・人文情報学)

本研究は、契丹国（遼朝）に関する新出現の遺跡・出土文字史料・文化財などを対象として、極力コストを抑えた手法を活用しつつ、研究資源として他の研究者も利用可能な客観的資料としてのアーカイブ化を行うことを目指すものである。

契丹国（遼朝）〔以下「契丹国」と略称する〕は、10世紀に北アジア遊牧民が主導して建設した国家で、その領域には遊牧民の契丹人のほかに定住民の漢人などが居し、北アジア的要素と中華的要素が混合した独特の制度・文化が形成された。かかる契丹国の歴史展開の中には、中華帝国と周縁諸民族との交渉を軸に展開してきた東アジア史の縮図を見いだすことができる。

その重要性および歴史的意義は以前から認識されており、研究対象とされてきたが、この国の史実を伝える文献史料は少なく、研究展開上では困難な点が多かったが、近年契丹国の中枢地域であった中国内蒙古自治区・遼寧省およびモンゴル国内において新たな遺跡や文化財が続々と発見されつつある。

こうした状況を踏まえつつ、本研究では国内外の関係機関の協力を得て意見交換や交流を行い、多角的視

点からの各種の資料評価を行うとともに、必要に応じて現地の遺跡・文化財の実見や再確認の作業を行うことなどを目的として、各種の活動を実施してきた。

昨年度は、まず４月に本研究所において科研班発足に係る打ち合わせ会議を実施し、次いで８月には中国遼寧省内の博物館・文物保管施設等を訪問し、対象となる文物などについての調査を実施するとともに、現地関係機関の関係者と意見交換などの交流を行った。さらに、１月には本学で各種の研究成果報告のための研究集会を行い、来日中の海外研究者も招いて当該分野の最新の学術情報に関する講演会を行った。

これら昨年度の研究成果については、昨年度末に刊行された本研究所刊行の『真宗総合研究所研究紀要』第31号に収録されているので、詳細はそちらを参照されたい。以上の概要については下記の如くである。

１．2013年度活動内容

４月20日　研究班発足打ち合わせ会議（本学）

８月12日～19日　中国遼寧省（遼陽市・瀋陽市・鉄嶺市・阜新市）訪問

１月18日　研究集会（本学）

研究報告：武内康則「契丹大字フォントの作製と異体字データベースの構築について

コメント：松川節

研究報告：藤原崇人「10～12世紀の東部ユーラシアと「北流」仏教」

コメント：橋堂晃一・横内裕人

外部研究者招聘講演：董新林（中国社会科学院考古研究所教授）「遼祖陵の発掘成果と2014年上京内発掘調査概要」

通訳：包慕萍・龔婷

コメント：江川式部・武田和哉

司会進行：武田和哉、従事：町田吉隆

２．2013年度研究成果物

『大谷大学真宗総合研究所研究紀要』第31号

「「デジタルアーカイブ技術による契丹国の歴史考古言語資料の復原的研究と集成」研究班 2013年度研究成果報告」（*39-108*頁）

Ⅰ「2013年度研究活動の概要」　武田和哉

Ⅱ「遼東仏塔初探―遼陽県塔湾塔について―」　藤原崇人

Ⅲ「内モンゴル敖漢旗喇嘛溝の遼墓壁画に認められる、台形胴の長頸リュートについて」　等々力政彦

Ⅳ「遼墓出土契丹陶磁に見られる契丹国（遼朝）の社会の階層性について」　町田吉隆

Ⅴ「遼寧省遼河流域の遼代州県城址についての踏査報告」　高橋学而

Ⅵ「契丹国（遼朝）の皇帝陵および皇族・貴族墓の占地に関する一考察」　武田和哉

なお、新たな研究課題等にも対応すべく、今年度から橋堂晃一・福井敏の両氏を新たに協同研究員としてお迎えした。昨年度の活動を継続しつつ、本研究テーマの主務のひとつであるデータベースの構築に向けての作業を実施する予定である。

共同研究

日本における西洋哲学の初期受容―フェノロサの東大時代未公開講義録の翻刻・翻訳―

研究代表者・教授　村山 保史
（西洋哲学・日本哲学）

本研究の目的は、清沢満之（1863－1903）と高嶺三吉（1861？－1887）の遺稿中に発見された東京大学在学時の哲学関係講義録（ノート）を翻刻・翻訳して明治期の哲学教師　E. F. フェノロサ（1853－1908）の講義内容を公開することであり、この作業を通じて日本における最初期の哲学思想受容過程の一側面を解明することである。

研究方法としては、〈調査・分析〉を主たる作業とした2010年～2012年度の科学研究費研究「日本における西洋哲学の初期受容―清沢満之の東京大学時代未公開ノートの調査・分析―」を継続しつつも、それを発展展開した研究として、清沢および高嶺筆記による講義録の〈翻刻・翻訳〉に重点を置いている。このため、本研究では以下の三つの研究課題を設定している。研究課題(1)：講義録の編集、研究課題(2)：講義録の思想的分析、研究課題(3)：清沢における西洋哲学受容の思想的分析。2013年度は研究課題(1)を重点課題とし、研究課題(2)と(3)を並行して行った。

より詳細には、以下の作業を行った。研究課題(1)に関しては、講義時期と講義科目を再確認したうえでの講義録の翻刻・翻訳作業（デジタル画像化された資料と原資料との照合作業を含む）を行った。この作業については、「清沢満之フェノロサ講義ノート」を集中的に翻刻・翻訳する班（２名。２名以外は翻刻・翻訳業

務補佐に当たった）と「高嶺三吉フェノロサ講義ノート」を集中的に翻刻・翻訳する班（２名。２名以外は翻刻・翻訳業務補佐に当たった）を選出し、上述の2010年～2012年度の科学研究費研究において訳出した箇所（『フェノロサ「哲学史」講義』に所収）に続く近代哲学史講義録の箇所を整理・閲覧し、翻訳作業に着手した（高嶺三吉フェノロサ講義ノートの作業については、資料写真番号058から080までの翻刻を進め、064まで終了している）。

研究課題(2)と(3)に関しては、(2)と(3)にかかわる準備作業として資料調査を実施した。2013年12月の金沢大学附属図書館（石川県金沢市）における資料調査である。学術論文や口頭発表等のかたちで公表した(2)と(3)作業の研究成果は、以下のものである。①村山保史「倫理と宗教―清沢満之の場合―」（口頭発表）、近代親鸞教学研究会第５回研究発表会、希望荘（三重県三重郡菰野町）、2013年８月、②竹花洋佑「田辺哲学における〈生〉の問題」（招待講演）、第１回田辺哲学シンポジウム、2013年９月、北海道大学、③藤田正勝「倫理と宗教―清沢満之の思索を手がかりに―」（招待講演）（講演録は『大谷大学初代学長 清沢満之―その精神（にんげん）にせまる―』大谷大学広報委員会に所収）、清沢満之生誕150周年記念シンポジウム、大谷大学、2013年10月、④Michael Conway, "Dharmākara as the Subject, Not Object of Faith: The Reinterpretation of Amida's Causal Phase in Modern Shin Thought"（口頭発表）、シンポジウム「仏教における信」（エトヴェシ・ロラーンド大学東アジア研究所と大谷大学真宗総合研究所の共催による国際シンポジウム）、エトヴェシ・ロラーンド大学文学部（ハンガリー、ブダペスト市）、2013年10月、⑤竹花洋佑「生と論理―西田の田辺批判と『種の論理』の意味―」（論文）、（『日本の哲学』第14号、京都大学、2013年12月、45～61頁）。

また、研究課題(1)～(3)の進捗を公開するものとして、HP（URL: http://www2.otani.ac.jp/~manshi/）を設置した。

共同研究

スティラマティの倶舎論注釈書『真実義』梵本写本第一章の研究

研究代表者・名誉教授　小谷 信千代
（仏教学）

本研究は『真宗総合研究所研究紀要』第26号（2009）、第29号（2012）に掲載された同名論文の続編であり、スティラマティ（Sthiramati, 安慧）による『倶舎論』注釈書『真実義』（Abhidharmakośaṭīkā Tattvārthā: TA）第一章の試訳である。本試訳は、現在のところ唯一その現存が確認されている、ポタラ宮所蔵のサンスクリット写本から再構成したTextに基づく。試訳の作成に際しては随時、『真実義』チベット語訳（北京版）と『順正理論』（大正新脩大蔵経）を参照し、適宜、ヤショーミトラ注とプールナヴァルダナ注を参照した。

作成の経緯としては、TAの校訂本を完成するための補助作業として、研究代表者である小谷が作成した試訳に、研究会において参加者より出された意見を参考にし、手を加えて成ったものである。

本試訳の範囲は、AbhidharmakośakārikāではAKK kk.9-11まで、Abhidharmakośabhāṣya（P. PradhanによるSanskrit-textの1st. Ed.）ではAKBh 5,19-8,9まで、櫻部建『倶舎論の研究』所載の和訳ではpp. 149-155までの箇所に対する、スティラマティによる注釈である。櫻部先生の分節によれば、『倶舎論』界品のうち、「〔十八〕界の解説」の第二節「五蘊・十二処・十八界」の第一項「色蘊、五根・五境・無表色」に相当する。すなわち当該箇所の主題は色蘊および五根・五境・無表色である。

本試訳が対象とする範囲においてもやはり、スティラマティは『順正理論』におけるサンガバドラ（衆賢）説を主な論敵としつつ注釈を進めている（『順正理論』との平行箇所については脚注に注記しておいた）。その他、軌範師アールヤダーサへの言及も確認される。また、サーンキャ学説の矛盾に関して、詳細はPramāṇasamuccayaを参照するよう委ねられている点、さらには諸処において仏教論理学に関する術語が使用されている点も注目される。スティラマティがディグナーガの著作に親しんでいた証拠である。

なお本稿より、加納和雄、上野牧生、松下俊英の三

氏が共著者に加わった。

共同研究

自主的主体的に学習する子どもを育てる教育実践の実証的研究

研究代表者・教授　関口 敏美
（教育学・教育史）

本研究では、「自ら学ぶ力」の基盤となる基礎学力を保障しつつ「自ら学ぶ力」を育む教育方法を解明するために、①京都市内の小学校（研究協力校：京都市立第三錦林小学校、京都市立山ノ内小学校、京都市立金閣小学校など）と②ユニークな授業・教育活動を行っている小学校（研究対象校：富山市立堀川小学校、福岡市立四箇田小学校）の協力を得て、フィールド調査により教育実践を調査・分析することを目的とした。

第一に、引き続き連携活動を行っている京都市立小学校（研究協力校）のフィールド調査で教育実践の観察・参観を行ない、「自ら学ぶ力」を育てる教育方法の探究を課題とした。

・第三錦林小学校：国語科、音楽科の連携活動
・山ノ内小学校：音楽科の連携活動
・金閣小学校：社会科の連携活動

第二に、富山市立堀川小学校・福岡市立四箇田小学校（研究対象校）におけるフィールド調査でユニークな授業・教育活動の観察を通して、「自ら学ぶ力」を育む教育実践の探究を課題とした。堀川小の調査には大学院生３名が、四箇田小の調査には大学院生１名が同行し、フィールド調査に協力した。

・堀川小学校フィールド調査：11月下旬、２月中旬
・四箇田小学校フィールド調査：３月上旬

また2013年度より本学科に大学院（修士課程）が開設されたことにより、高度専門職業人として、多様化する教育課題に対応できる「実践的研究力」とリーダー的役割を果たし得る「研究的実践力」を備えた教員の養成をめざすことになった。

このため大学院の授業と本研究とを連携して、学級経営や教科指導の実際を大学院生に観察・報告させ、その報告を共同研究会で協力校・本学科の教員が検討し、教員養成の一環としても、「自ら学ぶ力」を育む教育方法を解明することを課題とした。

次に、研究成果の一端として、堀川小学校でのフィールド調査を紹介する。

堀川小学校の教育実践は、大正新教育の伝統を継承すると共に戦後新教育の取り組みの中でさらに発展させられた。その特徴は、子どもの追究を中心に据えて、個別学習と協同学習を必要に応じて使い分ける授業にある。第一回（11月下旬）調査では、二日の日程で中学年と高学年の「くらしのたしかめ」、生活科・社会科を核とした総合学習、算数科・国語科・体育科の授業を参観した。

京都市や京都府の小学校で支援員やボランティア経験を有する大学院生たちであるが、堀川小学校の第一印象は、「教師の怒鳴り声がほとんど聞かれない」ことであった。低学年から高学年まで基本的におだやかな雰囲気で、「授業中悪ふざけをする子ども」や「人の話を聞かない子ども」がいないことに院生たちはとても驚いたようである。

放課後の研修会では、「堀川小の子どもたちは聴き合う姿勢が根底にある」、「低学年の子どもが自分の気持ちを相手に伝わるように言えるのはすごい」、「聴く姿勢が整っているから、自分の言いたいことをたれ流す話し合いではなく、お互いの話をきちんと聴き合って反応できている」などの発言のあと、堀川小学校の教務主任を質問攻めにして「自分の知っている小学校と堀川小学校との違いは何に由来するのか」が探求の課題となった。

第二回（２月中旬）調査では、二日の日程で低学年と高学年の「くらしのたしかめ」、低学年の特支学級（自閉症・情緒障害）の取り組み、社会科・算数科・国語科・理科・体育科の授業を参観した。また大学院生を特定のクラス（１年１組、４年１組、６年１組）に配当していただき、長時間観察ができるようにご配慮いただいた（すべて学年主任のクラス）。引き続き、堀川小の子どもたちの「聴き合い」に留意しながら調査を行った。

院生たちは始業前・下校前に行う「くらしのたしかめ」に堀川小の秘密があるとにらみ、「くらしのたしかめ」に特に注目した。教務主任によると、入学した日から「くらしのたしかめ」が始まり、低学年では担任が話を引き出す工夫をするが、学年が上がるにつれて子ども同士でやりとりを重ねていけるようになる。誰かが発言している時は、発言者以外の子どもは最後まで話を聴くルールになっている。

特別なことをしているわけではないが、１年生からの取り組みを通して、聴き合うことの素晴らしさを実感させ、友人の話を聴いて感じたことを言葉に表出さ

せる積み重ねの中で子どもたちの聴き合う力が育まれる。学習指導要領で言語活動の充実が強調されて久しいが、堀川小学校の実践は、「自ら学ぶ力」の基盤を育てることの意味を考えさせる。

共同研究

学際的利用を可能とするマルチプラットフォーム対応型系図表示ソフトウェアの研究

研究代表者・准教授　柴田 みゆき
(情報処理学)

1．これまでの研究の経緯

2006年度から我々は、複雑な表記を可能にする系図表示ソフトウェアのありかたを研究してきた。ある関係性を表示したいとき、1人（1つ）の個性ごとに任意の1箇所に表示し、それらを線分で結んだ系図を利用することがある。この関係性が複雑になると、個性を線分で結ぶときに交叉が生じる場合がある。これは従来の紙媒体上で表示される系図においては基本的な機能であるが、我々が研究を開始した当初は、コンピュータ上でこのような交叉線分を含む系図を表示できるシステムは存在しなかった。そこで我々は、不可視結節点による新しいデータ管理手法Widespread Hands to InTErconnect BASic Elements（略称：WHIteBasE）を用いた系図表示を提案し、プロトタイプソフトウェアを開発した。また、系図表示ソフトウェアに必要とされる機能を着実に実装してきた。

近年、他の系図表示ソフトウェアも、WHIteBasEと同様の機能を一部実装したものがある。しかし、一系系図や横系図といった系図史料の諸形式に従った系図表示や、個性の周囲への付帯情報の常時表示、血縁以外の養子縁組関係の表示、婚姻線分の屈曲・交叉を伴う多重再婚の系図表示等まで実装したものはなお、WHIteBasEのみである。

2．2013年度の研究成果の概要

2013年度に本研究班は、系図表示ソフトウェアの更なる拡張のための基礎研究を行った。研究の進捗報告及び会議として、真宗総合研究所ミーティングルームにおける計14回の研究会を開催した。この結果、後述する2点の成果をあげることができた。研究成果は社会へ還元すべく、国内外で計4本の学会発表を行った。また、2013年9月に海外調査旅行を行った。

これらの活動を基盤として科学研究費補助金を申請し、2014年4月に採択された。

2．2．研究成果概要

本年度の研究成果は、以下の2点である。

2．2．1．系図の省略・縮小表示の考案

系図の一部を省略するために、省略対象部分を選択して狭い領域に押し込めて（縮退させて）データを管理する手法Joint ABBReviation for Organizing WHIteBasE（略称：JaBBRoW）を提案した。これはWHIteBasEモデルを維持したまま縮退機能を追加するための新しいデータ管理手法である。なお、WHIteBasEによる系図の縮退範囲は、1つのイベントとして不可視境界線を用いて管理される。

この手法は、系図表示ソフトウェアに既に入力された個性を省略させようとするときに起こりうる、2点の問題を回避するために考案した。1点目は、省略された対象のデータを損なうことのない管理の必要性である。単に「(略)」「(○代略)」などの記号を用いると、入力した情報を後に重複して再入力するおそれが生じるからである。2点目は、省略された対象の表示を損なうことのない管理の必要性である。省略状況を解除したらただちに再表示できるよう、ユーザーの利便性を高めるためである。

2．2．2．システム間共有を前提としたデータ構造に対する提言

現在、系図表示システム間でデータを交換するための実質上のフォーマットは、GEDCOMである。この仕様では、父・母・子を単位とするデータ構造によってデータを保持する。しかし、データ交換フォーマットとしてのGEDCOMには重大な問題が2点存在することを、今般の調査で明らかにした。1点目は、1カップルに対し複数の子が記述可能である一方、1人の子に対しては同性婚カップルなど、父ないし母の複雑なありかたに対して記述が難しい場合が生じる。2点目は、個性や線分を自由な位置に表示させるための座標管理をさせる概念がない。このため、表示のための座標データは各系図表示システム内で設定し実装せざるを得ない。

上記の調査をもとに、データの共有を図るためには、新たにレイアウトに特化したデータ交換フォーマットとその運用方法を構築する必要があることを明らかにした。

2．3．研究成果の社会還元

本年度の研究成果として、情報処理学会第76回全国大会において、３本の発表を行った。これらの内容は『情報処理学会第76回全国大会講演論文集』に掲載された（pp.4-417～422, 2014.3.11.）。

また、ポーランドのAGH University of Science and Technologyにおいて開催された国際学会12th International Conference on Computer Information Systems and Industrial Management Applications（CISIM）において、本年度の研究の基盤となるWHIteBasEに関する１本の発表を行った（2013.9.26）。

2．4．調査研究

前述の国際学会CISIM発表にあわせ、ポーランド国内の系図表示状況の現地調査を行った。この結果、日本で多用される系図表示様式はほとんど使われていないことが明らかとなった。ポーランドでの現地調査を行ったのは、系図研究が盛んな他の欧州諸国の現地調査は既に済んでいたからである。

3．今後の展望

系図表示システムとしてWHIteBasEの概念とそのプロトタイプは先進的であるものの、汎用化にはまだ十分ではない。その一つが、海外、特に欧州の慣習的な系図表示手法に対する先行研究の検討である。これに対しては、2014年度より５年間にわたり、科学研究費補助金を受けることが決定した。その研究で得られる成果はもちろんのこと、多分野でそれぞれに実現が求められる複雑な関係性を表示できるよう、より汎用性の高い系図表示システムのありかたに関する研究を今後とも推進する予定である。

共同研究

80年代後の北京語に関する調査研究

研究代表者・准教授　渡部　洋
（中国語・近世の中国語文法）

本研究は2013年度に大谷大学真宗総合研究所の一般研究の研究費を得て本研究班のメンバーである柴田みゆき（本学准教授）、早川智美（本学非常勤講師）、清水由香里（本学非常勤講師）等と協同して行っている。研究の目的は80年代から現在までの北京語について調査し、語彙語法上の変化や北京語と標準語との関係を明らかにするための基礎資料を作成することにある。

現在、2011年中国で放映されたテレビドラマ『裸婚時代』の台詞を対象にして研究を進めている。『裸婚時代』は第30集もある長期に及ぶドラマであるため、その台詞をすべて聞き取り書き写すのに約１年かかったが、すでにデータベース化を完了している。また、月に１、２度の研究会を開催し『裸婚時代』の台詞に対し言語面での考察も行っている。当初予想していたよりも研究の進み具合は少し遅れてはいるが、収穫は多く研究会を行う度に北京語や新語についての発見があり、この『裸婚時代』が現代の北京語の実態解明に役立つ１資料になると考えている。

今のところ、語彙や語法に関しての調査が『裸婚時代』第２集まで進んでいる。これまで調査した台詞には「老爺們児（大の男）」「靠譜（頼りになる）」「老鼻子（非常に多い）」「趕明兒（明日・将来）」「沒准（はっきり言えない）」「趕緊（急いで）」「整（する）」「覺着（思う）」「急茬兒（差し迫っている事）」「犯困（眠たくなる）」「指不定（～とは限らない）」等の注目すべき北京語語彙が見られ、新語においては「留電話（連絡を取り合うために電話番号を交換する）」「彩信形式（写メール）」「老公（ダーリン）」「隠私（プライバシー）」「准父母（プレ親）」「炸猫（怒る）」「知情権（知る権利）」等がある。また、台詞全体を通して文末に「啊」、「是吧」、「是不是」等の語句を置いて念を押す表現や文末に主語置いて強調する表現が非常に多く見られる。まだ詳細に調べてはいないが、これまでの北京語に関する資料においてこうした表現はこれほど多くなかったように思える。これは恐らくドラマの台詞が持つ性格と関係していると考えられる。ドラマの台詞は口語主体であるが、これまで北京語資料として使用された小説のように書式体の語句を多く含むものではない。小説は読み物として成立するものでドラマの台詞のように演じる者の口から直接でるものではない。私が学生の時、劉宝瑞の単口相声（古典落語のようなもの）の１つをテープで聞いて書き取ったことがある。後にその書き取ったものが本に載っていた。見比べてみると異なる部分が沢山見つかった。例えば、「瞧」が「看」に直されていた。どちらも「見る」という意味だが、「瞧」は話し言葉にだけに使用でき「看」は話し言葉でも書き言葉にも使用できる。多分これは本に編集する際、読み物としての意識が働き、「瞧」を「看」に換えてしまったのだろうと思う。ドラマの台詞は読み物としての意識が働かないし、直接人の口から出る言葉である。時に

は役者が役に徹してこの方が自然だと感じたら、元の台詞とは異なる台詞を言ったりすることもある。テレビのない時代に小説を口語資料として使うことは当然のことだと思うが、80年代後半からテレビが急激に普及しドラマも多く作られるようになった時代になった今、ドラマの台詞も口語資料として大いに活用すべきだと考える。

この『裸婚時代』には世代の異なる人物が登場するので人物の言葉にも各世代の違いが見られる。登場人物の世代は大きく分けると次の3つになる。1つは文革後に生まれ貧困を味わっていない世代、2つ目は青春期が文革時代であった世代、そして3つ目は幼少期が日中戦争の時代で文革も経験している世代である。そして世代別に次のような特徴が見られる。文革後に生まれた世代の台詞にはパソコン、スマホ等に関係する語彙や台湾・香港等から入ってきたと思われる新語がよく見られる。青春期が文革時であった世代の台詞には文革当時に常用された言葉が見られ、幼少期を日中戦争時代に過ごした世代の台詞には成語や慣用句等が多く見られる。これらは大雑把な見方であるが、更に詳しく調べていけば、より具体的な特徴を見出すことが可能であると考える。

今回この1年間の研究期間内に『裸婚時代』以外に清朝末期の社会小説『小額』のデータベース化も行った。『小額』は清末満州旗族の松齢の作品で1908年に刊行され、当時の北京の高利貸しの横暴や医者の悪徳行為を描いている。使用している言葉は主に旗人の口語であり当時の北京語を知ることができる。そのため北京語の特徴ある語彙についてこの『小額』と『裸婚時代』を比較検討したいと考えている。『小額』はおよそ100年前の小説なので、『裸婚時代』の言葉と比べることによって現代の北京語の実態がより明確になるのではないかと期待している。

今後、以上の比較検討をした結果や『裸婚時代』の台詞に見られる特徴ある語彙についての結果、更には北京と上海で行ったアンケート調査の結果等を整理した後、何らかの形にまとめて論文雑誌に掲載したいと考えている。

個人研究

民族文化祭の総合的研究

研究代表者・教授　飯田 剛史
（社会学）

1．研究結果

現在日本における民族文化祭（民族まつり）の全体的実施状況、内容、組織、課題などについて総合的データを得た。

民族まつりが、多文化・多民族共生の社会意識形成において重要な寄与をなしつつあることが確認された。

本研究をとおして、民族文化祭各団体間のネットワークが形成され今後の発展に寄与する可能性がうまれた。

本研究実施の中で日韓にわたる十数名の研究者の協力が実現し今後の研究の発展の基盤となった。

2．学会報告および報告書

①学会報告：飯田剛史「民族まつりの展開と課題」日本宗教学会学術大会報告
2013年9月7日、国学院大学

②研究成果報告書・研究代表者飯田剛史編著『民族まつりの創造と展開』（上・下）2014年2月28日発行
（上巻・論考編、257頁、
第1章　民族まつりの展開と課題：飯田剛史、第2章　在日の精神史から見た生野民族文化祭の前史：玄善允、第3章　在日朝鮮人の民衆文化運動の思想とその論理：山口 健一、第4章　統合的社会文化運動としてのワンコリアフェスティバル：金希延、第5章　巡行する四天王寺ワッソ：宮本 要太郎、第6章　民族まつりコンテンツの内容分析：小川伸彦、第7章　京都・東九条マダンにみる「担い手意識」の拡大：片岡千代子、第8章　東九条のコミュニティ実践における民族まつりの位置：石川久仁子、第9章　東九条の歴史性と場所性：李定垠、第10章　下関・リトル釜山フェスタの実践：片岡千代子、第11章　地域の「多文化まつり」への参画からの気づきと学び：北村広美、第12章　戦後の北海道における民族マツリの展開について：田島忠篤、第13章　中国延辺州における朝鮮族の祭り：金賢仙、
コラム1．ええやんか！　おうみ多文化交流フェスティバル：飯田剛史、コラム2．尼崎民族まつり：飯田剛

史、コラム３．大阪ハナマトゥリ：飯田剛史、コラム４．大野遊祭（高槻市）：飯田剛史、コラム５．日韓交流おまつり：飯田剛史、コラム６．東九条マダンの「別の入り口」：渡辺毅、コラム７．物販店からみた民族まつり：池田宣弘、

下巻・資料編、350頁、

資料１．民族まつり／マダン チラシ集、資料２．民族まつり／マダン開始年表、資料３．2011年度全国まつり／マダン情報、資料４．民族まつり／マダン アンケート集 、資料５．民族まつり／マダン全国交流シンポジウム記録（2012）、資料６．『統一日報』（1994.1.1）民族まつり担い手座談会、資料７．みのおセッパラム「全国マダン会議」（1999）、資料８．ふれあい芦屋マダン「まちづくりマダン交流会」（2005）、資料９．民族まつり関係文献リスト）

個人研究

変動期の社会における法秩序の再構築
―南アフリカとカンボジアの比較社会学的研究

研究代表者・准教授　阿部 利洋
（社会学）

紛争を経験した社会が、その後どのようにして司法の正当性を回復し、社会構成員の法的ニーズに応えていくのか。その過程で、どういった独特の問題が生じ、どのような反応が展開することになるのか。そうした社会における法秩序の再構築は、理論的にはどのように把握できるのか。これらの問いに対し、本研究は、南アフリカとカンボジアという対照的な社会を比較対象として取り上げ、社会学的な分析手法を用いて答えることを目的とする。また、このアプローチにより、従来、政治学的・法学的考察に限定されがちであった平和構築・「移行期の正義」研究に、新たな知見を提示することを目指す。

上記の目的のもとに遂行された昨年度の研究概要は次のとおりである。

南アフリカでは、前年度に得られた知見にもとづき、「社会資源の再配分」問題に焦点をあてた調査を実施した。紛争後に被害への対処を行う選択肢としては、裁判を通じた刑罰があるが、南アフリカでは「非白人」を「より被害を被った社会集団である」と規定し、経済的機会の優先配分を行ってきた。しかし現実には、その実施状況をめぐる軋轢が生じており、さらにはポスト・アパルトヘイトのブラック・ナショナリズムが重なり、ゼノフォビア問題が注目されることにもなっている。この点に関して、紛争後の取り組みとして「和解」を「正義」に優先させた南アフリカが、その後どのようにして正義の領域を再検討してきたのか、ジョハネスバーグとケープタウン地域において、関連する研究者およびNGO活動家と意見交換を行った。

カンボジアでは、プノンペンにて特別法廷の社会的受容に関する現地調査を継続し、とりわけローカル・メディアの表象において、体制側／反体制側の報道傾向が、特別法廷の正当性にどのような影響を及ぼしているか、検討した。こうしたローカル・メディアのアジェンダ・セッティングを取り上げる際には、特別法廷の進行プロセスが直面している様々な問題（予算不足や被告の死去および健康状態の悪化など）を反映する考察の枠組みが求められる。本研究では、表出主義（expressivism）およびドラマトゥルギーの枠組みに着目し、カンボジア人市民の意識調査を通じて、現地協力研究者との共同執筆論文を作成した。同論文は、本研究の成果公開の一環として進めている論集の一部として公刊予定である。

理論的な課題であった「移行期正義に関する先行研究の整理」については、前年度までに得られた知見をもとに、'Is Transitional Justice as a Potential Failure? Understanding Transitional Justice based on its Uniqueness'（2013年10月）および'The ebb and flow of assemblage in Cambodian non-governmental organisation (NGO) movements : The case of human rights initiatives led by diaspora-returnees on the Khmer Rouge Tribunals (2)'（2014年３月）というタイトルのもとで報告し、関連研究者との質疑を通じて「動員過程の実証比較」という課題を得た。

昨年度の成果は以下のとおり。

[論文３点]

１．阿部利洋、2014、「マンデラの笑顔は問いかける――和解政策というアート」『現代思想』第42巻第３号、152-161頁
２．阿部利洋、2014、「弁護士マンデラのプラグマティズムと真実和解委員会」『アフリカレポート』52号（アジア経済研究所）、5-9頁
３．Toshihiro Abe, 2013, 'Is Transitional Justice as a Potential Failure? Understanding Transitional Justice based on its Uniqueness,' African Potentials 2013:

Proceedings of International Symposium on Conflict Resolution and Coexistence (Center for African Area Studies, Kyoto University), pp. 17-33

〔図書2件〕

1．阿部利洋、2014、「アフリカから紛争処理を学ぶ——南アフリカとルワンダの取り組みから」『アフリカ社会を学ぶ人のために』（松田素二編、世界思想社）266-277頁（分担執筆）

2．阿部利洋、2013、「南アフリカにおける和解政策後の社会統合——カラード・アイデンティティの再構築」『和解過程下の国家と政治——アフリカ・中東の事例から』（佐藤章編、アジア経済研究所）59-96頁（分担執筆）。

［口頭発表4回］

1．阿部利洋、「移民集住地区においてコミュニティを創造する——ヨービュー・ニュースの試み」日本アフリカ学会第50回学術大会（2013年5月25日、於・東京大学）

2．Toshihiro Abe, 'Is Transitional Justice as a Potential Failure? Understanding Transitional Justice based on its Uniqueness,' International Symposium on Conflict Resolution and Coexistence（2013年10月5日、Center for African Area Studies, Kyoto University）

3．阿部利洋、「移行期正義プロジェクトを報道する難しさ——カンボジア特別法廷に関するローカル・メディアの事例分析」日本社会学会第86回大会（2013年10月12日、於・慶應義塾大学）

4．Toshihiro Abe, 'The ebb and flow of assemblage in Cambodian non-governmental organisation (NGO) movements (2): The case of human rights initiatives led by diaspora-returnees on the Khmer Rouge Tribunals,' Symposium on Community Movements in Mainland South East Asia（2014年3月7日、Lanna Resort, Chiang Mai）

個人研究

プラトンの中期イデア論の生成

研究代表者・本学非常勤講師　西尾 浩二
（哲学・倫理学）

本研究は、平成23年度から25年度までの科学研究費補助金交付による研究であり、具体的な目的として以下の諸点が設定されていた。

(1)プラトンの前期対話篇にみられるソクラテスの「何であるか」の問い（「勇気とは何であるか」など一般に「定義の探求」とみなされている問い）から中期イデア論が生成するには、どのような背景があるのかを明らかにすること。

(2)この(1)の解明過程で前期対話篇のうちでもとくに「敬虔とは何であるか」を主題とする『エウテュプロン』に焦点を当て、探求における定義の優先性の問題や、イデア論とのつながりをはじめとしてさまざまな論点から、この対話篇を総合的に研究し、解説・注解付き翻訳を作成し公刊すること。

(3)これら(1)(2)を踏まえた発展的研究として、中期イデア論を捉えなおし、それによって中期プラトンの教育思想へ新たな光を当てること。

平成25年度は、前年度に引き続き、これら3点のうちで最も基礎的である(2)を主たるターゲットとして研究を進め、(1)についてはその過程で考察を加えた。（なお、(1)(2)を踏まえた発展的研究である(3)については十分に扱うことができなかった。）すなわち、まずプラトンの前期対話篇のひとつである『エウテュプロン』の新しい翻訳と注解の作成である。作成に当たっては前年度までと同様、翻訳の底本に（旧来のバーネット版 (Ioanenes Burnet, 1900) との異同にも注意を払いつつ）オックスフォード古典叢書（Oxford Classical Texts）中の新版であるプラトン全集第一巻デューク版（E. A. Duke, W. F. Hicken, 1995）を用い、多数ある英語訳と日本語訳をつねに参照、さらにいくつかのドイツ語訳とフランス語訳をも部分的に参照した。そして従来の研究に加えて最新の研究動向をも反映させるために、多数のコメンタリーを参照し、その上で研究代表者自身も注解を新たに作成しながら翻訳作業を進めた。

次にこれらの作業と平行して、ソクラテスの「何で

あるか」の探求における定義の優先性の問題をイデア論との関連のもとで解明することを試みた。探求における定義の優先性の問題とは、たとえば「美とは何であるか」（美の本質あるいは定義）をまず知らなければ「何が美しいものか」（美の事例）も「美は有益なものか」（美の特性）も知ることはできない、といった立場がソクラテスのものであるのか、またそうした立場が哲学的に正しいかどうかという問題である。この問題は、ソクラテスの対話活動（「何であるか」の探求）の有効性、ひいては広く哲学的探求の有効性にもかかわるものであり、近年ではギーチの問題提起（Geach, P. T. (1966) 'Plato's *Euthyphro*: An Analysis and Commentary', *Monist* 50, 369-82）に端を発する大きな論争が研究者の間に生じている。しかしながら、この問題に関する先行研究を調査し、イデア論の生成をも視野に入れつつ初期から中期にかけての対話篇を分析し考察を加えた結果、ソクラテスは上述のような立場をとっていると考えられるにもかかわらず、それは必ずしも哲学的探求を無効ないし不可能にするようなものではないという結論が得られた。

個人研究

日本で発見されたオリヤー語『マハーバーラタ』「津島貝葉」の校訂テキスト作成

研究代表者・准教授　DASH Shobha Rani
（インド学・仏教学）

本研究は、科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金（基盤研究(C)　2011年度～2014年度）の研究助成によって行なっている。その内容は、愛媛県宇和島市津島町に保管されている「津島貝葉」と名付けられたオディアー語（旧名オリヤー語）版『マハーバーラタ』の貝葉写本に関するものである。当貝葉写本は17世紀の初頭頃に書写され、江戸時代中期頃に日本に伝来したと考えられている。コロニー（Karaṇī）書体を使用し、中世オディアー語で書かれた221葉（両面記載）からなるこの貝葉写本の内容はインド東部・オディシャー州（旧名オリッサ州）の15世紀半ばの有名な詩人サーララーダーサ（Sāraḷādāsa）によってオディアー語で書かれた『マハーバーラタ』すなわち、『サララー・マハーバーラタ』（Sāraḷā Mahābhārata）の「森林章」の第一部に相当するものである。

本研究は、インド叙事詩『マハーバーラタ』の研究、とりわけその受容史の解明に有益である当該写本の校訂テキストの作成を中心とし、「津島貝葉」の異本の入手および「津島貝葉」を底本とした『サララー・マハーバーラタ』「森林章」第一部の校訂テキストの作成を目的としている。これらの目的を達成するために研究を進め、2013年度は、以下のような成果を得た。

(1)オディシャーの州都ブバネシュワルにあるオディシャー州立博物館を訪問し、「津島貝葉」の校訂に当たって、異本となる２本の貝葉写本のデジタルデータを追加入手することができた。両方の写本は、虫による損傷が酷いため、西オディシャーの異本として部分的に参考にしていく予定である。また、西オディシャーのバトリ村（バラガル地区）の個人蔵およびブルラー（サンバルプル地区）にあるサンバルプル大学博物館蔵にもう２つの異本の存在を確認でき、現地へ赴きデジタル撮影を行なった。これらの異本の文字解読を行ない、そのローマ字入力は今後の作業として進める。

(2)海外研究協力者のDr. M. Maithrimurthi（ハイデルベルグ大学・ドイツ）、Prof. U. N. Sahoo（ウトカル大学・インド）およびDr. Anirban Dash（プーナー大学・インド）と研究懇談会を実施し、2012年度に行なった研究内容を検証した。さらに、すでにローマ字入力済みの異本を用いて、出版レイアウト及び校訂のための正しい用語を確定するなど共同研究も行なった。

(3)インド南部・チェンナイにあるマドラス大学の東洋研究所（Oriental Research Institute）を訪問し、所長のSiniruddha Dash教授、Prof. K.V. Sharma Research Foundation研究所を訪れ、研究員のDr. Mamata Mishra氏から校訂技法および、インド叙事詩『マハーバーラタ』のような説話文学に関する写本の校訂作業を行なう際に出会う問題点について議論をした。

個人研究

保育者の悩み・学習ニーズの変容と同僚性を基礎とした研修に関する実証的研究

研究代表者・本学非常勤講師　黒澤 祐介
（社会福祉学）

保育カンファレンスの実証的な効果評価とモデル開発のため、京都市営保育所で若手保育士を対象としたカンファレンスを1年間に延べ約50回開催し、全保育士409名に対し個人IDを付与し「保育での悩み」など138項目の追跡型アンケート調査を2回実施した。

2013年度は、アンケートの結果からみえたカンファレンスの効果と、カンファレンスに参加した保育士や所長、研究者、京都市保育課課長に与えた影響について分析、評価を行った。

保育士の抱える悩みは保育士同士、特に管理職との人間関係が強く影響していることが明らかになった。また、保育カンファレンスを継続して行った6ヶ所では、カンファレンスを実施していない他の保育所に比べて、保育士同士や保育士と管理職との関係の良さが高まってきた。保育カンファレンスには、園内の人間関係を良くする効果があると考えられる。

保育カンファレンスは、特定の若手保育士を対象として1年間継続し、①午前中に保育観察を行う、②午睡時間内の1時間半ほど会合し、若手保育士から保育の悩みを出して、それについて5～10名程度で議論をすすめる、という方法で行ってきた。子どもの発達の見方や、どのような保育の工夫ができるか、また、同僚保育士からみた若手保育士自身の良いところなどを出し合い、自由に発言できる機会をつくることを心がけた。

保育カンファレンスの対象者に対しては、保育カンファレンスを受けての自分自身や保育の変化、例えば、職場の同僚に自分の悩みを伝えることで、他の職員から様々な視点からのアドバイスを受けることができ、自分にはなかった考えを吸収して自分の中の引き出しが広がるということや、クラスの子どもの保育を担任だけではなく保育所全体としてどうしていくべきか方向性を定めるなど、クラス間を越えた話し合いの機会となった。

保育カンファレンスの参加者に対しては、子どもと保育士との関係が人と人の関係であるように、保育士同士も人と人の関係であり、保育カンファレンスの取り組みのなかで、「こうしたらいいね」「してはいけないね」ということを保育士間で出来ているかを反省するだけでなく、職場全体で見返す機会となった。

カンファレンス実施保育所の所長に対しては、保育士同士が子どもにどのような力を育てなければならないのかという議論ができるような、環境づくり、子どもたちが自分らしく遊び生活するためには、保育士も自分らしく楽しいと思える保育と職場環境をどうつくるかが重要であることが明らかになった。

職員研修を担当する保育課では、保育の質の向上を目指す職場環境づくりについて、これまで保育課として研修の体系を整え、保育指導等を実施しているが、保育所内での人間関係を円滑に保ち、保育にやりがいが感じられる保育士集団づくりが重要でないかと考えられてきている。どのような職場環境等が保育の質の向上に効果的なのかを検証し、今後の研修等のあり方について考えていく必要があるという結論に至った。

以上をふまえ、保育カンファレンスがもたらした変化に関するプロセスモデル、及び、よりよい実施方法について分析を行った。

比較研究からは、保育カンファレンス実施保育所において非実施の保育所に比べ、保育者の仕事に対する満足度や、同僚性に関わる項目が有意に上昇していることがわかった。1回目ではカンファレンス実施保育所と非実施保育所の間に有意さはなかったが、カンファレンス実施後3回目のアンケートより、有意差が見られてきた。保育カンファレンスに同僚性の醸成に寄与する効果があることを証明した。

個人研究

触法知的障害者の更生と地域生活定着を促進するピアサポートプログラムの開発と評価

研究代表者・教授　脇中　洋
（発達心理学・法心理学）

キーワード：触法知的障害者、更生プログラム、「クラウニング講座」、自己肯定感、ピアサポート

研究概要

本研究（2012～2014年度・科研費基盤研究(C)課題番号24530750）では、知的障害が疑われる受刑者（触法知的障害者）の矯正施設出所後に地域生活定着が促進されることを目的とした更生プログラムの一環として、ピアサポートプログラムを出所前後にわたって行いながら、プログラム内容を練成しながら評価を行う実践的研究を計画していた。

その後、播磨社会復帰促進センター特化ユニットの障害受刑者を対象とした「クラウニング講座」における受刑者の変化を２年間にわたって観察し、当センターおよび委託された社会福祉法人との共同研究協定を結ぶに至ったことから、研究目的を「クラウニング講座」の効果検証を中心に行う方向で調整した。

クラウニングとは

クラウニングとは、サーカスなどの大技の幕間に登場し、観客との間で道化的な芸をやってみせるエンターテイメントで、講座の対象者は特に他者とコミュニケーションをとりづらい10人程度の受刑者たちである。講座はプロのエンターテイナーが２人の助手を連れて講師を務め、週に１度の90分間、計16回、４ヶ月間行っている。

毎回の講座の流れは次のようなものである。

①名札を配る人と、「三つの約束」を読み上げる担当者を受講生の中から決める。

②帽子を取って、講座の時間帯のみ用いるクラウンネームを書いた名札を付ける。

③全身と顔の筋肉、発声のための準備体操。身体を柔軟にほぐしてリラックスさせる。敢えて「だらしない顔」をしてみたり、百面相をしたり、大声で笑ったりといった生き生きとした表現をするための準備。

④クラウンとしての解説と実践

内容は毎回異なるが、反復しているのは「トリップ・テイク・リアクション」（皆の前を歩いて、何かにつまずくフリをして、つまずいた物を覗き込んだりして、それから大仰に驚いてみせる）。その際のポイントは、大きな動作を取って、しっかり制止する時間を持つこと。この基本を押さえれば、後は遊び心あふれる表現をしていく。

この他に「パントマイム」「スタイル＆バウ」（横一列になって、一人ずつ前に出てきてポーズを決めて挨拶をして、最後は全員で掛け声とともにお辞儀をする）などを練習する。

なお最終回には同じ教室で、刑務所長らを前に発表会を行う。また５回目、10回目、最終回の後には、輪になって振り返りを行う。

彼らはなぜ変わっていくのか

講座の初期には受講生に恥ずかしさや戸惑いが先立っているが、数回続けて行くうちに、次第に堂々とした態度で前向きに取り組み自己表現をするようになっていく。これは、受講生がどんな表現をしても皆で拍手をし、講師が必ず肯定的に受け止めて褒めていることが大きい。

特にクラウニングの魅力は、失敗しダメな自分をさらけ出すことが面白さにつながるところにある。障害受刑者たちは、乏しい成功体験から肯定的に評価された経験がなく、更生に向けての第一歩として自己存在を肯定的に受容するところに意義があると考えている。

今年度後半に向けて

2014年度は、クラウニング講座における知的障害受刑者を縦断的に調査して、自己肯定感、自己効力感の変容を調べるほか、引き続きヴィクトリアの仮出所者の聞き取り調査を重ね、さらに2013年度にも調査した米国ホノルルにおける受刑者が社会復帰するプロセスを再調査する予定である。

これらの活動を通じて、触法知的障害者の更生状況の評価とともに矯正施設や出所後の福祉施設職員を対象とした組織論的な連携も評価対象とし、個人の発達臨床的かつ能力論的な変容だけでなく、領域横断的な調査及び評価を行う。

研究計画当初に更生プログラムにおけるピアサポート活動の評価を行う予定でいたが、「クラウニング講座」はピアサポート活動とはたしかに異なるものである。だが「クラウニング講座」における自己肯定感の醸成と維持は、ピアサポート活動の効果と軌を一にするもの

であると思われる。

文献

独立行政法人・国立重度知的障害者総合施設のぞみの園（2011）『平成22年度障害者総合福祉推進事業「福祉の支援を必要とする矯正施設等を退所した知的障害者等の地域生活移行を支援する職員のための研修プログラム開発に関する調査研究」報告書』
刑事立法研究会（2005）『刑務所改革のゆくえ　監獄法改正をめぐって』現代人文社
日本犯罪社会学会（2009）『犯罪からの社会復帰とソーシャル・インクルージョン』現代人文社
内田扶喜子・谷村慎介・原田和明・水藤昌彦（2011）『罪を犯した知的障がいのある人の弁護と支援　司法と福祉の協働実践』現代人文社

個人研究

バガヴァティー・アーラーダナーの新校訂本作成と全訳によるジャイナ教の断食死研究

研究代表者・本学非常勤講師　河﨑　豊
（インド学・仏教学）

ジャイナ教修道論上の大きな特色として、最期を断食死で迎えることを理想のひとつとする点があげられる。このような特色に根差す身体観や死生観は、単に南アジア宗教研究という側面のみならず、関連諸分野の観点からも注目されるものである。これまでも、ジャイナ教における断食死の実態に関する研究は行なわれてきたが、研究の基礎となる一次文献の批判的校訂や現代語訳についてはほとんど存在しない。本研究はそのような状況を打開すべく、シヴァーリア（1～2世紀？）作『バガヴァティー・アーラーダナー』を研究対象し、全編の校訂本と全訳へ向けた総合的な研究を行なうものである。

当該文献はジャイナ教における断食死の次第を扱うものとしては最古層に位置しその後多く作成された断食死マニュアルの範となった重要な作品であり、言語学的にも十分に研究されていないジャイナ・シューラセーナ語で執筆されているにも関わらず、当該文献の全体にわたる批判的校訂本は存在しない状況にあることを考慮した故である。

今年度の研究方針としては、①新校訂本を作成するための写本状況の調査②現代語訳を作成するにあたっての個別的な教義の研究という2点を中心に据えた。以下、それぞれの研究概要について述べる。

①に関しては、まずインド各地で出版される写本目録の入手と調査に勉めた点は前年度と同様である。それに加えて、今年度は2013年11月に大谷大学で開催された、パリ第3大学教授Nalini Balbir博士によるジャイナ教文献講読セミナーにおいてBalbir博士とヨーロッパの大学図書館に所蔵される『バガヴァティー・アーラーダナー』写本について意見交換を行なう機会を得た。その後、Balbir博士の仲介により、2014年3月にストラスブール大学図書館が所蔵する『バガヴァティー・アーラーダナー』の2写本の写真版を入手することができた。次に、2013年12月下旬にインドのグジャラートおよびラージャスターンへ調査旅行に赴き、特にL.D.Institute of Indology及びPatanのジャイナ教写本図書館にて『バガヴァティー・アーラーダナー』写本に関し現地研究者と意見交換を行なった。

次に②に関しては、前年度と同様、基本的に週1回のペースで代表者が作成した暫定的な『バガヴァティー・アーラーダナー』校訂本と下訳に基づき、原典および訳文について検討を行なった。本年度に取り扱ったのは、第33章「連続的指導」部分のうち、「不淫の掟」（871詩節以下）を議論する箇所である。この研究会での成果として、冒頭部分における「10種類の非性的禁欲」という法数項目について、白衣派聖典に見られる類似の法数項目の内容と比較検討し、「10種類の非性的禁欲」の祖形的法数を白衣派聖典に求めることは不可能であること、シヴァーリアは当時彼が知り得た聖典・注釈に散在する性的禁欲に関する記述を収集し、独自の法数項目にまとめ上げた可能性が強いことを指摘した論考を、「Bhagavatī Ārādhanā 873-874」と題して『中央学術研究所紀要』42号（2013年11月）に発表した。また、色欲に苛まされる者が受ける、死に至る十段階の衝撃という概念が他のジャイナ教文献にも見いだされることを指摘し、比較検討を行なった論考を、「ジャイナ教文献におけるdaśa kāmāvasthāḥ」と題して『待兼山論叢（哲学篇）』第46号（2014年12月出版予定）に投稿済である。

この研究会での成果と並行して、同章「連続的指導」における「不偸盗の掟」および「無所有の掟」部分の研究を補足するための調査を、『バガヴァティー・アーラーダナー』以外のジャイナ教文献を資料として行なった。そのうち不偸盗の掟に関しては、ジャイナ教にお

いてそもそも偸盗がいかに定義づけられるかを、註釈文献および論書を中心に検討し、その成果を2013年８月に開催された日本印度学仏教学会で報告し、また『印度学仏教学研究』62巻３号に「Interpretations of adattādāna in Jainism」と題する英語論文として発表した。また無所有の掟に関しては、８世紀の白衣派ジャイナ僧ハリバドラスーリが著した『ダルマサングラハニー』において無所有の掟を議論する箇所を調査し、その成果の一端を2013年11月に開催された大谷大学仏教学会例会で「ジャイナ教の仏教批判―教団による村落での所有をめぐって―」と題し、また2014年１月に開催された真宗学・仏教学助教合同研究発表会では「服を着るのは罪悪か」と題しそれぞれ報告を行なった。なお前者については、その報告を基礎とする論考を『佛教学セミナー』に投稿済である。

個人研究

タイ国を中心とする東南アジア撰述仏教説話写本の研究

研究代表者・本学非常勤講師　清水 洋平
（仏教学・南伝仏教）

東南アジア大陸部の上座仏教圏には、土着の文化とハイブリッド化し、独自の発展を遂げた仏典が多く存在する。しかし、このような東南アジア撰述の仏典の多くは、現在、貝葉や折本紙による写本のまま、一部寺院の経蔵に無差別に保管されているものが多く、所在やその内容は不詳のものが多い。また、所蔵環境も良くないことから隠滅の危機に瀕している。この状態を危惧する研究者並びに研究機関がその調査・収集、或いはカタログの作成に努力している。

このような現状を踏まえての本研究は、タイ国を中心に従来より同地に継承されたクメール文字で記された貝葉写本を中心に、同国に流布する東南アジア独自撰述の仏教説話写本を調査・収集し、その網羅的な研究を目指すものである。先ずタイ国中部地域の寺院が所蔵する貝葉写本の所在目録を作成し（ほぼ完了）、個々の文献の一次資料としての資質を検証し、併せて既出の所在目録との横断的な整理を行う。そのことを通じて、東南アジア撰述仏教説話写本研究の基礎となる一次資料所在目録及びデータベースの構築とその公表を目的とする。以降、個別写本研究に進み、特に東南アジアの積徳行について文献学的な裏づけに基づく仏教学の立場からの研究に歩を進める。

本研究は、従前の科研プロジェクト「タイ国中部地域の王室寺院が所蔵する東南アジア撰述仏教説話写本の研究」を承け、その研究課題の中で作成した同地域の寺院が所蔵する貝葉写本の文献タイトルのみを記した所在目録を改善し、国内外の研究者、研究機関の要望に的確に応え得る新たな所在目録・データベースの構築を先ず行うため、本年度は、次の整理作業を実施した。

(1)初年度で整理された所在目録（個々の文献の写本資料としての資質を整理したもの）をベースにして、文献ごとに様々な既出の所在目録との横断的な整理を行った。具体的には、次の資料に記されている情報との統合・整理が中心である。①フランス極東学院名誉講師Jacqueline Filliozat女史が作成、公表されている東南アジアの仏典写本に関わる所在目録（EFEO DATA Filliozat. Database for Pāli documents, studies and bibliographies of Jacqueline Filliozat. Free CO-ROM available on request at EFEO Library）。②P. Skilling and Santi Pakdeekham, *Pali Literature Transmitted in Central Siam,* FPL Bangkok, 2002.

(2)初年度で整理された所在目録のその正確性を高めるために、写本調査を実施してきたバンコク：バーンコークヤイ区所在のWat Ratchasittharam、Wat Arun、Wat Hong Rattanaram、並びにバンコク郊外バーンクンティアン区所在のWat Hua Krabeuの４ヶ寺を再訪し、所蔵されているパーリ語貝葉写本文献についての意見交換を各寺院の長老と行った（2013年８月３日～９日）。また、既に貝葉写本文献の所蔵リストが保持されているバンコク：プラナコーン区所在の第一級王室寺院Wat Phoにおいて、「タイ王室版」の一つとされる同寺院が所蔵する貝葉写本を参照しながら、初年度に整理した所在目録の中の一部の文献について、タイトル等の比定確認の作業を実施した（2014年３月16日～22日：但し、大谷大学真宗総合研究所の業務を兼務）。

尚、これらの整理作業、比定確認の作業に加え、本年度は、７月２日～５日にポルトガル：リスボンで開催された国際会議（The 7th European Association for South East Asian Studies (EUROSEAS) Conference）において、当該研究の現在までの研究成果を発表すると共に、発表内容を*Southeast Asia Library Group Newsletter* No.45に執筆した。また、クメール文字パーリ語で記された東南アジア撰述仏典写本のうち、大谷大学が所蔵

する稀覯文献*Mahābuddhaguṇa aṭṭhakathā*について、研究協力者である舟橋智哉氏と共同でローマ字転写テキストを作成し『真宗総合研究所研究紀要』第31号に掲載した。

個人研究

後期田辺哲学における象徴概念の研究

研究代表者・本学非常勤講師　竹花 洋佑
(哲学・日本哲学)

本研究の目的は、田辺元の象徴概念の理解を通して彼の後期哲学の意味と可能性とを明らかにすることである。本研究は次の三つの課題から構成されている。(1)田辺の象徴概念の基本的意味とその思想史的背景とを明らかにすること。(2)後期の田辺哲学の中での象徴の意味と位置とを、彼の宗教哲学ないしは共同体論の核心的概念である「実存協同」との関わりにおいて解明すること。(3)『ヴァレリィの藝術哲学』および『マラルメ覚書』の中で田辺が論じる象徴詩の問題との関係で田辺の象徴概念の具体的な意味と可能性とを明らかにすること。

第一に、象徴概念の基本的意味を明らかにしておくことが研究の前提として必要とされる。まず田辺が象徴概念を提起する際の背景を発展史的および思想史的なアプローチから明らかにすることが求められる。象徴概念は後期哲学の出発点となった『懺悔道としての哲学』において重要な位置を占めるものであるが、しかしそれはかなり唐突な仕方で語られるものである。したがって、象徴概念の基本的な意味を理解するためには、田辺のそれまで思索の展開において象徴ということが論じられる必然性がどのようにして生じてきたのか、さらにそうした必然性が生まれる契機となった思想史的背景はどのようなものであったかを理解する必要がある。第二に、象徴と種という二つの概念の関連性を捉えることが求められる。すでに述べたように両者は共に否定的媒介性という意味を担う概念であり、象徴の基本的意味を捉えるためには、その否定的媒介性の内実が種とどのような共通性と相違性をもつのかが具体的に見定められなくてはならない。

第二の課題は、後期の田辺哲学の中での象徴概念が有する意味と位置とを、彼の宗教哲学ないしは共同体論の核心的概念である「実存協同」との関わりにおいて解明することである。象徴と種との関連性を捉えるにあたって留意されなければならないのは、否定的媒介性を担うものは種から象徴へと移行するにもかかわらず、後期においても種という概念は放棄されているわけではない点である。後期における種と象徴との並存という問題を捉えるためには、媒介性という論理的なアプローチ以外の視点が求められる。すなわち、種も象徴も共に田辺の共同性の概念に関わりをもつことに注目することによって、後者の前者との関わりおよび後者の概念の後期における位置を田辺の「実存協同」という構想との関係で明らかにする必要がある。

最後に田辺が論じる象徴詩ないしは象徴主義との関係で象徴概念の具体的な意味を明らかにしていく。そのためにはまず田辺がヴァレリーやマラルメの象徴詩をどのように理解しているかを明らかにすることが必要となる。田辺の象徴詩の解釈の内実を、田辺が批判的に対決している解釈やそれ以外の現在の主な解釈との関係で明らかにした上で、象徴概念の哲学的意味の解明を行なっていく。具体的には、その意味を死や偶然性の問題において顕わとなる人間の個体性と「実存協同」として語られる個体の共同性とが結びつく地点として捉えることを目指していく。

このような研究の目的をふまえて、2013年度は以下の研究を行なった。

(イ)西田哲学も田辺哲学も共に「生の論理」あるいは「生命の論理」として把握される側面をもっている。その場合に、後者の前者に対する違いはどこに見いだされるのか。田辺の「生の論理」の特質が、西田におけるような生命の表現の論理ではなく、生を否定的媒介性とみなすところにあるということを、西田による田辺批判を手がかりとして明らかにした。(「生と論理—西田の田辺批判と「種の論理」の意味」、『日本の哲学』第14号、日本哲学史フォーラム、昭和堂、2013年)。

(ロ)田辺哲学における象徴概念の由来と意味を探る研究を行った。上記の研究目的との関係でいえば、この研究は(1)および(2)の研究に該当する。象徴概念の由来という問題は、まず田辺がどの時点でまたどのような目的で象徴概念を積極的に用い始めたのかを確定する作業として明らかにされた。その中で、表現概念に対する批判という文脈で田辺が象徴という問題に突き当たったことを解明した。さらに、この〈表現－象徴〉という対比の背景には、波多野精一や高山岩男の象徴理論の間接的な影響が考えられること

を明確にした。また、象徴概念の意味については、ヤスパースの象徴論との対比で明らかにした。

個人研究

グローバル化時代における「人権」概念とセクシュアル・マイノリティの包摂

研究代表者・任期制講師　赤枝 香奈子
（社会学）

本研究は、近代において社会の周縁に位置づけられてきたセクシュアル・マイノリティが、現在のグローバル化する社会の中でその「人権」を認められ、社会に包摂されつつある現状に注目し、それがいかなる歴史的変遷を経てのことであるのか、そこで使われる「人権」概念を再検討しつつ、セクシュアル・マイノリティの可視化と承認のプロセスを明らかにすることを目的とする。その際、セクシュアル・マイノリティの中でも特に不可視とされているレズビアンについて、日本とフィンランドという、女性同性愛に対し異なる抑圧形態をもった二つの国を比較し、彼女たちに対する差別や偏見、不可視化の圧力と、それに抗する対抗的生き方やネットワーク形成のあり方について検証する。

近代では、同性愛者やトランスジェンダーなどセクシュアル・マイノリティと呼ばれる人々は、まさにマイノリティ（少数者）として、異性愛者とは異質な存在とみなされ、社会の周縁に位置づけられてきた。しかし近年、彼／彼女らの「人権」が認められ、また同性婚など彼／彼女らが取り結ぶ関係が、従来の家族とは異なる新たな親密な関係として認知されつつある。しかしそれは当のセクシュアル・マイノリティたちによって、必ずしも諸手をあげて賛同されているわけではない。なぜなら、そこでは異性愛者同様の「よき市民になること」を要請され、異性愛者と同化することが暗黙のうちに求められているからである。このようにセクシュアル・マイノリティの生き方や承認のあり方をめぐる議論がさかんな現在、世界でいち早く同性間パートナーシップ制度を導入し（デンマーク、1989年）、同性婚を認める国々もある北欧では、そのような新たな親密性が将来の可能性として議論される段階を過ぎ、実際に「生きられる」ものになっている。しかし、これらの国々で同性愛者に対する差別や偏見、嫌悪や憎悪（ホモフォビア）が完全になくなったわけではない。

同性愛者の承認は、社会のホモフォビアに対抗する中で要請されてきたが、その際、「人権」が重要なキーワードとなってきた。しかし日本の場合、ホモフォビアへの対抗的言説において「人権」が有効なキーワードとはなってこなかった側面がある。そのことが、セクシュアル・マイノリティの社会的包摂とどうかかわっているのか、フィンランドの事例と比較しつつ、日本のホモフォビアの内実とセクシュアル・マイノリティ承認のプロセスと現状について明らかにする。

本研究でまず取り組みたいことは、日本におけるホモフォビアの様相、特に女性に対するそれを明らかにすることである。というのも、同性愛を法で取り締まったり、宗教的観点から断罪したりすることがない日本の場合、ホモフォビアがどのような性質をもち、いかなる形で現れるかすら十分には解明されていないからである。これまでの自身の研究から、日本において女性同性愛（者）に対するホモフォビアが強くなるのは、1960年代末から70年代にかけてであることが明らかとなった。そこで本研究初年度である2013年度は、レズビアンについて触れた1970年代以降の新聞・雑誌記事を収集し、分析する作業に着手した。また、日本におけるセクシュアル・マイノリティの社会的包摂については、セクシュアル・マイノリティの人権をテーマとするセミナーや「セクシュアル・マイノリティと医療・福祉・教育を考える全国大会」、セクシュアル・マイノリティに関係する資料を収集しているLoudで開催された「Loudライブラリ見学会」、同性婚／同性間パートナーシップ制度にかんするシンポジウム等に年間を通して参加し、現状を調査した。

フィンランドでは夏に現地調査を行い、タンペレのフィンランド労働博物館（WERSTAS）で開催されたシンポジウム、Queering the Memory Institutionsに出席し、セクシュアル・マイノリティの歴史をたどり、それを残すという作業についての現状と手法を学んだ。現在、WERSTASは、タンペレのセクシュアル・マイノリティ支援団体（Pirkanmaan SETA Tampere）やタンペレ大学の研究者たちと協力しながら、セクシュアル・マイノリティにかんする資料・記憶のアーカイブ化を進めており、同時期にその展示も行われていた。展示には、インタビュー映像、カップルの間でかわされた個人的なメモ、トランスジェンダーの人々の服、アート作品など、多様なものが含まれていた。また、このシンポジウムの共催でもあった、セクシュアル・マイノリティの文化的包摂にかんする提案および実践にかかわる組織、The Culture for All Serviceを訪れ、インタビューを

行ったほか、フィンランドで長年に渡って開催されたレズビアン文化イベントに尽力した人物等にもインタビューを行った。その結果、セクシュアル・マイノリティの社会的包摂にかんする多様な活動、アプローチ、ネットワーク形成のあり方、その歴史について知見を得ることができた。

日本では、2013年3月に東京ディズニーリゾートで初の同性同士の結婚式が挙げられ注目されたこともあり、セクシュアル・マイノリティの包摂というと同性婚／同性間パートナーシップ制度の導入がイメージされることが多い。あるいは、セクシュアル・マイノリティの生存そのものをおびやかすような事態（自殺率の高さ、HIV／エイズへの感染等）を問題化する場面も多々見受けられる。これらは、日本のホモフォビアとその影響、またそれらに対するセクシュアル・マイノリティ側のある種の応答を示すものであり、今後も注目していきたいと考えている。ただ、セクシュアル・マイノリティの社会的包摂という点では、他にも多様な形、観点がありうるのではないかということを、フィンランド調査から学んだ。もちろん、セクシュアル・マイノリティにかんして、フィンランドにはあまり見られないが、日本には豊富に存在するものもある。例えば、雑誌やマンガ、あるいはバーなどのサブ・カルチャーである。これらは、異性愛者とは同化しない生をイメージさせるものとしても重要な意味を持つと考えられる。

このような、ホモフォビアやカルチャー／サブ・カルチャー、ネットワークやコミュニティがどのように互いに関係しながら、セクシュアル・マイノリティの生を規定したり、あるいは変化させたりするのか、今後の調査から明らかにしていきたい。

個人研究

共感覚の進化的基盤を探る

研究代表者・講師　高橋　真
（比較認知科学）

共感覚（Synesthesia）とは、特定の知覚領域と別の知覚領域が結びつく現象である。共感覚として、数字に色が自動的に結びついて知覚されるなど特殊な事例が知られている。ただし、共感覚は特殊な現象ではなく、一般的にも存在する可能性がある。例えば、「明るい音」や「暗い音」といった比喩表現は、音と明度といった直接は結びつかない感覚が同時に生じているために成立すると考えられる。つまり、比喩表現の基盤に共感覚がある程度の影響を与えていると言えよう。さらに、例示した比喩表現が日本語のみに限らないことから、共感覚は人間に遍在する知覚現象と言える。

共感覚の成立は、不要な神経結合が刈り取られなかった結果と考えられている。ただし、この刈り取りは、生後の経験によるものであるとする仮説や人間の言語機能と関連したヒト固有の現象であるとする仮説もあり、明確な結論は得られていない。

共感覚の成立要因を明らかにするためには、共感覚の進化の道筋を辿り、共感覚の進化をもたらした理由（選択圧）を明らかにする必要がある。そのためには、ヒト以外の種と比較をすることでその選択圧を解明する比較認知科学的な研究が重要となる。

言語能力との関連することから、ヒト以外の種に共感覚はないと考えられてきた。しかし、近年の研究により、「明るい音」や「暗い音」といった共感覚的な知覚をヒト以外の動物であるチンパンジーが有している可能性が示されている（Ludwig, Adachi, & Matsuzawa, 2011）。Ludwigら（2011）は、見本として出てきた刺激と同じ比較刺激を選択する見本合わせ課題と呼ばれる条件性弁別課題の遂行中に、音を提示した。見本と一致する音（白色に対して高音、黒色に対して低音）と一致しない音（白色に対して低音、黒色に対して高音）の成績を比較すると、一致しない組み合わせの探索効率が低下したことから、チンパンジーにもヒトと同じような共感覚が生じている可能性を示唆している。また、チンパンジー以外の動物ではラットがヒトと同じように視覚的なノイズと聴覚的なノイズに対して共通性を知覚している可能性が示されている（高橋・谷内・藤田，2010，高橋・谷内・別役・藤田，2013）。

これらの先行研究から、共感覚の進化的起源が言語をもたないラットまで遡ることができる可能性が示されているが、比喩的な表現の共感覚的な知覚に対しての詳細な検討が必要である。高橋（2013）は「明るい音」・「暗い音」といった比喩表現に対応する刺激に対する選好をラットで調べたが、ラットがチンパンジーやヒトと同様の知覚をしているといった証拠を得られなかった。ただし、高橋（2013）の研究は刺激に対する選好という変動性の高い指標を用いているため、微細な知覚現象を検出できない可能性が高い。実際にラットが比喩表現的な共感覚を有しているかどうかを検証するためには、Ludwigら（2011）が用いた弁別課題中の

音刺激による妨害効果での検討も必要となる。

そこで、本研究では、明度の高い刺激と低い刺激の弁別課題中に、比喩表現的に一致する音と一致しない音に対する弁別課題の成績をラットにおいて比較した。

アルビノラット12個体を用いて実験を行った。実験装置として、T字型の走路を用いた。白色刺激（明るい刺激）が提示された時は右、黒色刺激（暗い色）が提示された時は左の走路を選択すると餌がもらえる条件性位置弁別課題を、半数のラットに訓練した。残りの半数のラットには刺激と選択位置の配当を逆の組み合わせで訓練した。訓練は１セッション40試行として、２セッション連続して正答率が80%以上、もしくは、３セッション連続して75%以上の正答率をラットが示すまで訓練した。

訓練終了後、テストを行った。テストでは、訓練と同じ条件性位置弁別課題を行う試行（ベースライン試行）と弁別課題中に音も同時に提示される試行（テスト試行）を合わせて行った。テスト試行では、一致条件と不一致条件の２つの条件を設定した。一致条件では白色にときに5000Hzの純音（明るい音）を、黒色のときに1000Hzの純音（暗い音）を提示した。不一致条件では逆の組み合わせで提示した。このテストを４セッション行った。ラットがヒトやチンパンジーと同じように共感覚的な知覚を生じているのであれば、不一致条件では音によって想起された表象の妨害によって弁別の成績が一致条件よりも悪くなるはずである。

実験の結果、すべての個体が訓練を終了した。チンパンジーの先行研究と同様に、各条件の効果量（正反応時間の中央値÷正答率）を算出して分析した結果、一致条件よりも不一致条件の効果量が高くなった。すなわち、不一致条件においてラットの探索効率が低下した。この結果はヒトやチンパンジーの結果と一致する。このことから比喩表現的な共感覚の起源はラットまで遡ることができる可能性が示唆された。

引用文献

Ludwig, V. U., Adachi, I., & Matsuzawa, T. 2011. Visuoauditory mappings between high luminance and high pitch are shared by chimpanzees (*Pan troglodytes*) and humans. *Proceedings of the National Academy of Sciences*, 108, 20661-20665.

高橋真　2013　ラットにおけるクロスモーダル知覚の検討　『大谷大学真宗総合研究所紀要』 30巻，p125-140.

高橋真・谷内通・藤田和生　2010　ラットはクロスモーダル知覚をするか？　『動物心理学研究』，60巻，p187.

高橋真・谷内通・別役透・藤田和生　2013　ラット・ハムスター・ヒトの共感覚　『日本心理学会第77回大会発表論文集』，p571.　2013年９月19日　札幌コンベンションセンター.

個人研究

インド・チベットにおける般若学の研究

研究代表者・名誉教授　白館 戒雲
（仏教学）

大乗の代表的経典『般若波羅蜜経』は、紀元前後、大乗の最初期に登場した『八千頌般若波羅蜜経』など様々なものがあるが、いずれも実践主体の菩薩と、彼の実践する智恵の完成（般若波羅蜜）を詳説する。ナーガールジュナがその直説の深い空性を解明したのに対して、マイトレーヤ（弥勒）著『現観荘厳論』は、おもに『二万五千頌般若波羅蜜経』の広大な行を体系化し、チベットの伝承ではマイトレーヤの五部論の一つとされる。それに対するアーリヤ・ヴィムクティセーナ（６世紀中頃か）やハリバドラ（８世紀末）の註釈は、経文と結びつけて大乗の広大な実践階梯を詳説し、以降のインド大乗仏教に大きく影響を与えた。

『現観荘厳論』は11世紀半以降チベットでも盛んに学ばれた。『同論』とハリバドラ著『註釈・明義』を中心とした「般若学」は、学問寺での「五大学科」の第一として教学の主柱になり、宗派を越えて多くの註釈が著された。中でも最大宗派ゲルク派の開祖ツォンカパによる註釈『善釈金鬘』と、その法嗣タルマリンチェン（Dar ma rin chen. 1364-1432）による『釈論・心髄荘厳』は、盛んに学ばれ、註釈や要約が多く著された。『善釈金鬘』は、ツォンカパの若い時代の著作であり、インドの諸註釈とチベットの諸学者の見解を豊富に採取しているが、独自の思想は多くない。他方、彼の円熟期の思想や講義内容を受け継いでまとめたものが、『釈論・心髄荘厳』である。これらは、セラ・ジェツンパなど伝統継承者の註釈を通じて学習され、学問寺ごとに伝統が形成された。

本研究者は、亡命先のインド、ネパールで1950－60年代に最高峰の学僧たちのもとで、暗記、問答を通じた

伝統的方法により、『釈論・心髄荘厳』、セラ・ジェツンパの註釈を学んだ。現在、この方面では、『二万五千頌般若経』やハリバドラの梵語原典の校訂出版など研究状態が整いつつある。本研究者は以前、兵藤一夫本学名誉教授と協力して内容調査を行ってきたが、2009、10年には『宝徳蔵般若経』、『金剛般若経』へのチベットの学僧たちの註釈を和訳研究したほか、2011年には、30年間の自他の研究成果を加えて、『弥勒法の研究』改訂版を刊行した。12年2月にはインド、チベットでの般若学の概要と伝統を研究した論文を発表した。これは、近年、チベット自治区で古い註釈文献が公刊されているのを歴史書の記述と照合し、系統づけたものであった。

このように状況下において、藤仲孝司氏（すでに15年間、共同研究を行っており、チベット仏教文献の和訳研究に知識と経験を有する）の協力を得て、『現観荘厳論』『註釈・明義』『釈論・心髄荘厳』とセラ・ジェツンパの註釈の和訳作業と、関連する『二万五千頌般若経』とインド撰述の註釈文献の対比検証を、開始した。『現観荘厳論』Ⅰの第17偈までとそれに関するハリバドラ著『註釈・明義』は概論部分であり、すでに兵藤名誉教授により研究発表されている。本研究者は2012（平成24）年度に、続く第18から第20偈と、『註釈・明義』『釈論・心髄荘厳』などの和訳研究を行って発表した。この部分は、『二万五千頌』などに出てくる仏の三つの一切智性（二乗の一切智性、菩薩の道智性、仏の一切相智性）の広釈を開始するものであり、「発菩提心」を主題としている。発菩提心は、一切相智に関する誓いであり、それを実践するための教誡の基礎ともなる。

2013（平成25）年度には、それに続く第21から第24偈について同様の研究を行った。この部分は、発心に基づく修行の方便を説く「教誡」を主題としているが、その内容として僧宝を論ずるいわゆる「僧伽二十」の項目が詳説される。これは、『般若経』での諸々の実践が難解であるから、声聞の四向四果を喩えとしたものであり、『倶舎論』や『アビダルマ集論』への論及が多く、難所の一つである。この部分でも、『二万五千頌般若経』やインドの註釈文献との関連を解明するために、『善釈金鬘』、セラ・ジェツンパと照合して研究することが必要である。その成果は、ツルティム・ケサン、藤仲孝司「『現観荘厳論の釈・心髄荘厳』第1章より「教誡」の和訳研究」（『成田山仏教研究所紀要』37, 2014）として発表した。以降の読み合わせをも蓄積しており、第3章までの和訳が完成したので、翌年度以降、順次、詳しく研究して成果を発表する予定である。

また、補助的な研究については、チベットで有名な「菩提道次第」は、『現観荘厳論』の教誡とも言われている。ツォンカパの顕教での主著『菩提道次第大論』は、すでに前半三分の一が本研究者、後半三分の一が故長尾雅人博士により和訳研究が公刊されている。本研究者は全体を校訂するとともに、残りの部分、すなわち大乗の発菩提心と六波羅蜜、四摂事と止住まで一応、和訳研究していたが、今年度、徹底的な研究を行い、2014年10月に公刊できた。これにより名著『菩提道次第大論』の和訳研究が揃った。

個人研究

『中辺分別論』の未解読チベット語註釈写本の研究

研究代表者・本学非常勤講師　松下 俊英
（仏教学）

本研究は、大谷大学図書館所蔵のチベット蔵外文献に収められている、『中辺分別論』のチベット人（作者不明）による註釈写本を研究対象とし、当該写本の読解を目的とする。

世親が註釈をなした『中辺分別論』は、安慧のサンスクリット復註が現存し、それにもとづき世親釈を読解することが今日の唯識思想研究の主たる方法である。しかし安慧釈の写本は右側3分の1が欠損している上、『中辺分別論』に対するインド撰述の註釈書は安慧釈以外現存しないことから、『中辺分別論』の正確な読解にはチベット撰述の註釈が重要な役割を持つ。よって本研究は、『中辺分別論』の内容理解の一助となる当該写本の読解を第一の目的とする。あわせて写本のデジタル撮影及び校訂テキストの作成を行い、両者をウェブ上に公開することを目指す。

本研究対象写本の体裁は、全55葉、縦11cm、横63cmの大きさで、『中辺分別論』の偈をウチェン書体の朱字で書き、世親による註釈をウチェン書体の黒字で書き記している。さらに『中辺分別論』が記されている行間に、ウメー書体で細かな註釈がほどこされている。

平成25年度において、全55葉ある写本の撮影を完了させ、正確な画像データを取得した。さらにその画像データにもとづき翻字テキストを作成している。翻字テキスト作成の際、当該写本の『中辺分別論』の偈については、北京版・デルゲ版をはじめとする大蔵経各版のテキストとの対校を行っている。同様に世親釈につい

ても大蔵経との対校を実施している。

ウメー書体で記されたチベット語註釈は、複数の行をもち、コラムのような形式で、ウチェン書体で書写された『中辺分別論』の行間に点在している。コラムとコラムの間が不明瞭な場合があり、またそれぞれのコラムが『中辺分別論』のどの部分に対する註釈かが明確でないため、まずは細心の注意を払い、各コラムを区分し、そのコラムごとに翻字作業を実施している。翻字作業にはワイリー方式及びユニコート方式で作成している。ウメー書体が非常に細かく難解な部分も多いため、翻字作業と平行して翻訳作業を実行し、翻字の校訂を行っている。現在、両作業を継続している段階にある。

個人研究

日本泳法　神統流の伝承と史的実相に関する調査研究 —判明した成果と課題—

研究代表者・教授　中森 一郎
（体育学）

標題の本調査研究は、神統流第16代宗家黒田清光によって神統流が世に公開された昭和10年以降の資料に基づいて「1)神統流に関する史的調査」、「2)神統流泳法と伝承に関する調査」、「3)神統流保存資料の調査」の実施を具体的な目標課題として進めました。その途中経過は、本所報No.63（pp.42-43）に中間報告として述べました。調査研究の進展は、おおむね初期に想定していた目標に近いところまで達せられたと考えています。

その結果としては、新たな判明や事実の確認・検証に至った成果と調査過程で出現してきた新たな課題があります。以下、目標ごとの成果と新たな課題の２点から概略を述べます。

１．調査研究から判明した成果

1)神統流に関する史的調査

(1)黒田家の系譜

①黒田家の系譜の中の黒田頼満：近江の黒田宗満四男の黒田頼満が下向して薩摩黒田家の初代となったとありますが、これまで近江黒田の系図類において黒田頼清の記載は『島津家文書』にしか見られませんでした。今回、『山中氏　世系』に見出すことができました。

②筑前黒田：『島津家文書』の「諸家系図　三」「黒田」に「領筑前黒田」との記載から‘福岡黒田’の系譜に関する諸説を見ると、‘近江黒田’よりも赤松氏を出自とする‘播磨黒田’の流れと深い関わりが考えられるとの情報を得ました。

(2)神統流宗家の系譜

①歴代宗家の史実：黒田清光記述『黒田血族関係の氏族現況』（昭和38年４月現在）に記述された各代宗家の歴史的史実を鹿児島の歴史資料と照合の結果、社会史（戦争や災害など）の記載はほぼ史実に添っていますが、個人の業績的な（戦功や戦死など）事実は神統流５代宗家黒田嘉兵衛頼清以外に見出すことができませんでした。

②神統流現代潮手繰方としての宗家：昭和10年発行『薩州伝来　潮手繰方神統流梗概』（以下『梗概』と略す）「神統流現代潮手繰方」とする記述があり、「序」に自ら「現代宗系」としているなど、黒田清光を創始者とする宗家の系譜が成り立つことが考えられました。

(3)明治以降昭和初期までの鹿児島における水泳事情

①新聞記事：明治天皇の明治５年鹿児島行啓と水泳に関する追想（明治40年）記事が見つかり、明治後半から鹿児島の学校水泳や競泳などの記事も見出すことができました。

②一般資料：『鹿児島市史』の学校水泳や山内流資料からの同流泳法流布など新たな情報が収集できました。

(4)黒田清光による神統流の公表・公開

①郷土新聞の再調査と嘗ての収集資料から：昭和７年から昭和10年までの神統流が世に公示され公開された過程についておおよそのことが判明しました。

(5)‘神統流現代潮手繰方’の解釈

①『梗概』の記述：先の１.(2)②で取り上げた‘神統流現代潮手繰方’は、家伝という私的伝承から鹿児島における新たな地域文化としての泳法の伝承への転換と捉えました。

(6)戦後の神統流の歩み

①黒田清光死去（昭和54年）後を再確認するとともに、神統流再興の試行的段階を経てより平成９年に発足した‘神統流研究会’のことから平成14年‘神統流保存会’と名称変更しての今日までの経緯について神統流保存会から情報提供を受けました。

2)神統流泳法と伝承に関する調査

(1)用語的な解釈

①「体差」「股捌き」「足捌き」：具体的表記と解釈について、神統流保存会と協議・検討の上ある程度の見解を得ました。

(2)泳法の現在解釈と解説文の作成

①「業三品」：神統流基本業「捨の業」「差の業」「抜の業」の解釈と解説を神統流保存会と協議・論議の上、解説文作成まで漕ぎ着けました。

②「応用業」：神統流の基本業を発展させた表現として現在までに実演されたことがあると思われる９演技（「水書」「水剣」「水射礼（かしゃらい）」「水神祭」「組み業」「鑓（やり）業」「甲冑」「銃術」「削掛」）について神統流保存会と協議・試行・論議の上、「鑓業」「甲冑」「銃術」を除く６演技についての解説文作成に至りました。なお、「水神祭」の神事は、戦前の復活再現段階にまで達することができました。

(3)泳法の実践

①プールでの実践：神統流泳者による「業三品」の完成形を、数回確認できました。

②川内川と錦江湾での実践：本質的に自然の中で泳ぐことの実用性を重視しての泳法であることから、神統流と縁のある川内川と錦江湾で神統流泳者に「業三品」による実演を試みてもらいました。

(4)ビデオカメラレコーダーによる泳法の撮影と収録

①水上・水中からの撮影：上記(3)のプールと自然環境での実践をビデオカメラレコーダーを用いて水上・水中・複数アングルからなどの撮影収録を実施しました。

(5)収録映像の編集保存

①専門家の協力：神統流保存会の会員でパソコンを用いての映像処理などができる情報処理専門家に、上記(4)のビデオカメラレコーダーで収録した映像を、今後の保存と活用を考えてDVDに編集する作業を依頼し、１枚のDVDとして編集録画化することができました。

3)神統流保存資料の調査

(1)第18代宗家黒田清定宅の保存資料

①黒田清範宅から黒田清定宅への移管とその後：黒田清光の死後、その次男黒田清範宅に神統流資料が保管され、その死去（平成５年）後、三男黒田清定宅に大半が移管され、三男死去（平成19年）後である今回の調査において、部分的な散逸なのか所在不明な資料などのあることが判明しました。

②資料目録の作成：①の状況の中、中森複写所蔵分から再複写にて補うなどの上、一時対応としての「黒田清定宅保存資料一覧」を神統流保存会とともに作成するに至りました。

２．調査研究から生じた新たな課題

1)神統流資料に見る不思議

(1)疑問・矛盾・誤りなど：今回の調査研究を進めていく中で、黒田清光が残した記述資料において、断定に至れないまでも、明らかな不思議或いは論理的不整合な記述が数多く存在することが判明しました。多面的な検証が必要かと思われます。

2)黒田清光の古石塔研究から見た疑念

(1)古石塔研究者による指摘：黒田清光は、晩年、古石塔の調査研究に没頭し著名であったようです。その古石塔研究上の手法等に問題があると指摘した論文が、鹿児島地域の史的研究に関わる研究誌に近年発表されました。その論述では、古石塔の測定と判別手法などに見られる解析上の主観性や論考に含まれた創作性など、客観的な論拠を示して研究手法そのものを言及するものでした。

(2)黒田清光の研究手法：仮にこの黒田清光の古石塔に関する研究手法上の問題点を①の神統流資料に見る不思議の理解に当て嵌めた場合、本質的な部分で黒田清光の論述には共通性のある疑念が存在すると考えられます。

3)不思議と疑念からの伝説化

(1)地域の文化としての目論見と威信のための伝説の成立：古石塔研究の問題性は学術的な論拠を失うほどの要件に直結するかも知れません。しかし、仮に黒田清光の神統流論述に虚実と創作が判明したとして、これまでの神統流の伝承や伝統を否定するに値するかどうかと考えた場合、神統流を創始した背景に、黒田清光の泳者としての実力や鹿児島地方の水泳環境や事情を考究したなど地域文化的な意味合いを考慮する必要があると思います。また、現時点での史的な調査では調べ尽せない状況があることから、神統流を世に公開した昭和10年以前の系譜や伝承を伝説として留めるのであれば、その可能性は検討するに値するかも知れません。

4)現在解釈としての伝承と伝統

(1)‘神統流現代潮手繰方’を起点とした神統流の伝承と伝統：昭和10年に公開された神統流泳法の伝承を‘神統流現代潮手繰方’と記述しています。これが新たな地域文化としての伝承泳法の起点と考えるのであれば、疑いようのない史的経過を今日まで刻んできたと明言できると考えます。

(2)新たな解釈の検討：現段階で昭和10年を神統流泳法の創始と考えたとしても、不思議や疑念を捉えた上で、伝説・伝承・伝統について新たな解釈と認識を課題として検討する必要があると思われます。

個人研究

摂食抑制及び食べ過ぎに関する認知的研究

研究代表者・准教授　田中 久美子
（社会心理学・教育心理学）

研究年度内の成果を以下に２つ報告する。

まず、主たる研究テーマの「思考制御による制御資源の消費及び思考リバウンドへの影響」についてである。本研究では、思考抑制の逆説的効果を食領域に応用し、思考抑制を含む複数の思考制御の比較により、摂食抑制の認知過程を明らかにすることを目的とした。具体的には、しりとり課題を使って、食品についての思考を制御する計３条件（非食品条件、食品条件、統制条件）を設定し、思考制御の後に、食刺激に対する大きさの評定を求めた。この一連の手続きにより、思考の逆説的効果への影響、さらには抑制対象となる食刺激への認知の違いを比較検討した。摂食抑制の程度による大きさ知覚の違いを調べるため、体重増加への影響の観点から、食刺激は健康的食品と不健康的食品とを用意した。

女子学生計150名を対象とした実験は、2013年７月及び10月に、心理学の講義時間中に約20分かけて集団で行われた。結果としては、思考抑制の逆説的効果が、食べ物以外の言葉でしりとりを作成する非食品条件において見られた。つまり、食べ物に関する思考を抑制することによって、かえって食べ物に関する思考が増えるという侵入思考の増加が確かめられ、先行研究の知見や理論（Wegner, 1994）に符合するものであったといえる。ただし、この効果が摂食抑制の程度の違いを反映するものではなかった点については、しりとり課題の教示の曖昧さが影響していた可能性もあり、実験材料及び教示内容の整備が今後の方法論上の課題になるだろう。しかし、その後の食刺激のサイズ知覚では、思考抑制を行った非食品条件の摂食抑制群が不健康的食品を大きく評価していたことから、食規制により、かえって不健康的食品への摂取欲求を高めることにつながっていたのではないかと考えられた。これは、思考抑制の逆説的効果の頑強さを示すものであり、今後は顕在・潜在の両レベルでの効果検証が必要になるといえる。

本結果を日常のダイエット行動に適用するならば、王道的な方法とされる、食べ物について考えないようにする（非食品条件）のではなく、むしろ食べ物のことを考える（食品条件）、あるいは考えても考えなくてもよい（統制条件）とする方が、有限の制御資源の活用という点でも効率的であり、不健康的食品への魅力を過度に高めることもないだろう。意図的な思考抑制は心身に負担となるばかりでなく、考えないように試みること自体が、かえってその対象への注目を集めさせ、思考増加につながることを知っておく必要がある。

ところで、上記研究内容に沿った話題を、Sports Graphic『Number Do Early Summer 太らない生活 2014（文藝春秋、平成26年５月26日発行）』に掲載していただく機会を偶然にも得た。近年話題となっている「意志力」をダイエット行動に適用し、効果的なダイエットの方法・考え方について心理学的に解説するという記事である。詳細については、「Number Do 白熱教室　意志力とダイエットの科学」（pp.96-97）をご一読くだされば幸いである。

次に、学会発表について報告する。2013年11月２～３日に、日本社会心理学会第54回大会（会場：沖縄国際大学）にてポスター発表を行った。論文題目は「情動的摂食と食品のカロリー量推定バイアスについて」である。本研究では、テスト不安時の情動的摂食において、健康的および不健康的食品を対象に、摂食抑制状態によるカロリー量推定の違いを比較検討した。主な結果として、摂食抑制群は甘味スナックを体重増加に影響しそうな食品として忌避しながらも、一方で情動的摂取に向いた食品として好む傾向があるため、カロリー量を過小評価することで食べても太らないという安心感を得て、摂取に伴う罪悪感を軽減させているのではないかと推察された。この発表内容については、日本社会心理学会のホームページ上で閲覧可能である。また、同研究は再分析を行い、健康心理学研究に投稿中である。

今後は、カロリー量推定をはじめとする栄養情報の認知の問題と食への希求動機とを統合させて、食品の健康感形成に至る心理的プロセスについても詳細に調べたいと考えている。

個人研究

戦後沖縄芸術思想史論
—彫刻家・金城実の親鸞思想に関する領域横断的研究—

研究代表者・准教授　福島 栄寿
（近代日本仏教史・近代日本思想史）

本研究班では、沖縄県読谷村在住の彫刻家である金城実氏（1939～）の彫塑作品や書かれたテクスト類に着目し、彼に受容された親鸞思想を沖縄の戦後真宗思想史を考察することを目的として、2013年度の一年間、研究活動に取り組んできた。以下、その概略を報告したい。

2013年度前期中においては、金城実氏と連絡を取り合い本研究の趣旨を理解していただくなかで、金城氏は「平敷屋朝敏と親鸞思想」と題する原稿を執筆し、氏自らにとっての親鸞を語る意味を再度確認したいということになった。７月には、その草稿（一万字程度）を提出いただいた。琉球王朝時代に王朝風刺を咎められ処刑された組踊作家の平敷屋朝敏（1700～1734）の存在が、なぜ沖縄の芸能史において黙殺されてきたか。金城氏はそこに沖縄における天皇制の問題を指摘する。念仏弾圧をうけ弟子を処刑され、自らも流罪された親鸞が朝廷を批判した姿と朝敏を重ね合わせながら、沖縄における親鸞思想の今日的意義を、朝敏の再評価と合わせて主張する内容となっている。この金城氏の草稿は、本研究班の重要な資料である。

次に、沖縄に於けるフィールド調査及び金城氏への聞き取り調査を、年度中に三回実施した。一回目は、８月５日～９日（４泊５日）であった。主に金城氏の自宅兼アトリエに存置される彫塑作品類を調査した他、金城氏への聞き取りを実施した。また村内の図書館、歴史民俗資料館で資料収集を行った他、古書店で書籍資料を購入した。加えて、金城氏の生まれ故郷の浜比嘉島内をご一緒に案内いただきながら、フィールド調査を実施し、生家や先祖代々の墓、少年時代を過ごされた山や海岸等を訪れた他、平敷屋朝敏の処刑の地等を調査した。

二回目は、11月８日～11日（３泊４日）であった。金城氏の彫塑作品が存置されてある伊江島へフェリーで渡り、１泊２日で、金城氏と共に島内のフィールド調査を実施した。公益質屋跡、旧日本軍滑走路跡を見学した他、伊江島村民俗芸能発表会で組踊を鑑賞した後、沖縄戦中に島内で亡くなった死者の慰霊碑「芳魂之碑」を見学した。伊江島は、かつて農民の阿波根昌鴻氏（1901～2002）が先頭に立って、米軍と土地闘争を繰り広げた歴史があるが、その阿波根氏が拓いた福祉村「わびあいの里」（里の入口門には金城氏作の彫塑作品「鬼面」の他、里内には阿波根氏の像が存置されている）の「やすらぎの家」と平和資料館「ヌチドゥタカラの家」を訪れた他、「わびあいの里」代表理事である謝花悦子氏にもお話をうかがうことができた。その他、金城氏が尊敬する山内徳信氏（元読谷村長・前参議院議員）の激励会にも参加した。

三回目は、2014年２月15日～18日（３泊４日）であった。主な目的は金城氏が主宰する「琉球親鸞塾」の主要メンバーである知花昌一氏が、村内に初めて開く寺院「何我寺（ヌーガジ）」の道場開きの法要（２月16日）に参加することであったが、翌日午前中に知花氏への聞き取りも実施することが出来た。加えて、真宗大谷派沖縄別院を訪問し、相良晴美輪番と長谷暢職員から沖縄別院の現状や沖縄における宗教事情等について聞き取りをした。

以上のフィールド調査中には、金城氏とその関係者から合わせて10時間以上の聞き取りを実施したが、ICレコーダーに録音したデータは、業者による文字起しを行い、さらにアルバイトの大学院生に校正作業を依頼し、資料としてほぼ整えることが出来た。

最後に、本研究班の研究成果の中間報告として、2013年度中に実施した３回の発表について述べておきたい。一回目は、７月31日に龍谷大学仏教文化研究所で開催された「親鸞像の変遷」研究班主催2013年度７月研究会で、「試論・現代沖縄と親鸞思想—彫刻家・金城実と真宗同朋会運動—」という題で発表をした（発表時間１時間20分・質疑応答30分）。ここでは、一回目のフィールド調査の事前準備を目的とした考察を発表した。二回目は、2014年２月８日に龍谷大学を会場に開催された、科研費に基づく共同研究プロジェクト「近代宗教のアーカイヴ構築のための基礎研究」第２回研究会で、「現代沖縄と親鸞思想—彫刻家・金城実をめぐって—」という題で発表した（発表時間1時間・質疑応答30分）。そして三回目は、３月22日に大谷大学で開催された大谷大学日本史の会３月例会と共催で本研究班の中間報告会として実施した。一年間をかけて収集した彫刻家・金城実氏の作品集、著作類、聞き取り調査記録を資料として、金城氏の芸術観・宗教観、とりわけ親鸞思想について考察を行った（発表時間45分）。合わせて、金城

氏をお招きし、「平敷屋朝敏と親鸞と沖縄と」という題で講演会を実施した（講演時間１時間）。

以上が、本研究班の2013年度中の活動の概要の内容である。三回にわたり沖縄へのフィールド調査及び金城氏とその関係者への聞き取りを実施できた他、その調査研究に基づく中間報告発表会を三度行い、加えて金城実氏自身の講演会を開けたことは、研究班として大変充実した研究活動を行えたものと考えている。現在は、真宗総合研究所紀要への研究成果論文を作成中である。

個人研究

「宗教間体験の現象学」構築のための基礎的研究

研究代表者・任期制助教　古荘 匡義
（宗教哲学）

本研究では、異なる宗教間の対話を、互いの宗教を理論的に「理解」することとしてではなく、他の宗教と関わる各個人の「体験」や「実践」のなかで宗教的なアイデンティティが変容していく現象として捉え、「宗教間体験」と名付ける。そして、この「宗教間体験」の現象を記述し、この体験の本質を追究することが本研究の目的である。

旧来の宗教現象学は、さまざまな宗教現象を外側から比較し、それらの本質を直観することによって、宗教現象内部の構造を解明するものである。それに対し、本研究は、ハイデガー以降の現象学・存在論を参照しつつ、他の宗教と対話するという実践に巻き込まれながら自己の存在を了解している人間のあり方を記述することを目指す。たとえば、他の宗教に対峙している状況のなかで、他の宗教から実存的な衝撃を受けたとき、自らの信仰に対する絶対的な確信は揺るがないけれども、自らの信仰に対する態度や信仰内容が変化してしまう、という体験はあり得るだろう。本研究は、他の宗教に巻き込まれるなかで、自らの宗教的アイデンティティが保持されつつも変容されていく体験を「宗教間体験」として捉え、このような体験の中で生じる、人間の自己の根源的な変容を現象学の手法を使って分析する。

研究成果としては、以下の２点にまとめられる。

①２年間の研究計画の中で、１年目（平成25年度）は、本研究の基盤となる「宗教間体験の現象学」の理論を構築した。その際、研究代表者がこれまで研究してきたフランスの現象学者、ミシェル・アンリ（1922－2002）の思想を活用した。私見では、彼の哲学は、さまざまな実践を行う自己の根源的な体験やアイデンティティの変容を解明する理論を提供している。特に、「キリスト教の哲学」と自称するアンリ晩年の思想は、キリスト教の聖書とアンリの「生の現象学」とが並置される形で論述されている。このような形式の思想は普通、キリスト教の教義を前提とした神学になるか、聖書の内容を哲学に還元するような思想になる。しかし、アンリは自らの思想はどちらでもないと主張している。それでは、一方に他方を還元するわけでもないのに、聖書の章句と哲学的な理論をわざわざ並置した理由は何であろうか。ごく簡単に言えば、アンリは、聖書が有する真理と自分の「生の現象学」が有する真理が実は同じものだと主張するのだが、この真理は、「生の現象学」の理論的著述の中ではなく、聖書の章句と「生の現象学」とを繰り返し《照合》するという実践において顕になっている。だからこそ、「キリスト教の哲学」は聖書と哲学を《照合》する形式をとる必要があったのである。

このような理論は、宗教と宗教との対話実践において生じていることを解明するためにも有用である。というのも、アンリの哲学は、異なる宗教を信仰する者が互いの信仰について論じ合うという実践において生じている「宗教間体験」を解明するための理論にもなるからである。

このような研究の詳細は、まだ公刊には至っていない。しかし、課程博士論文「ミシェル・アンリの『実践＝哲学』」（平成25年12月に京都大学に提出）の後半部分で論じている。さらに、理論の中心的な部分は国際ミシェル・アンリ学会の雑誌（***Revue internationale Michel Henry***）に投稿した（掲載決定）。また、日本宗教学会の学術大会等で研究成果を発表し、宗教間対話に関心をもつ研究者との議論や交流を行うことができた。

②さらに、上記の理論を２年目の研究において具体的な実例に適用して検証するための準備をすすめた。当初の研究計画ではダライ・ラマ14世の宗教間対話の実践を扱う予定であったが、宗教間対話に関する文献を蒐集するなかで、この検証に相応しい実例をいくつか発見した。

たとえば、明治30年代に日本で開花した高山樗牛・綱島梁川・清沢満之らの思想的実践である。当時の大学

で哲学を学んだこの3人の思想は、結核による闘病生活のなかで、煩悶や挫折、あるいは宗教的修養や「見神」を体験することを通して、大きく変容する。しかも、この変容は、修養や体験を言説化することを通して、哲学や諸宗教の思想を貪欲に摂取しながら実現する。このような彼らの思想の深化の過程を一種の思想的実践として、すなわち、「哲学と諸宗教の間での対話の体験」として分析していく予定である。

個人研究

ディケンズと絵画

研究代表者・任期制助教　木島 菜菜子
（イギリス文学）

本研究の目的はチャールズ・ディケンズの文学と絵画との相関関係を実証的に示すことである。ディケンズは自分を「想像性溢れる写真家」と表現し、視覚的な表現に極めて意識的な作家であった。同時代の批評においてもその視覚性や対象の精緻な描写が高く評価され、近年は特にヴィクトリア朝時代に発達した科学技術や視覚文化からの影響についての研究が進み、演劇や大衆文化との結びつきや挿絵画家との関係の多くが明らかになってきた。しかし、例えば同時代の作家ジョージ・エリオットに関しては絵画との関係を総括的かつ体系的に論じた研究書が出版されているのに対し、これまでディケンズの研究では、絵画との関連は全くと言っていいほど論じられてはこなかった。本研究は、ディケンズの視覚的想像力が絵画から受けた影響や絵画に及ぼした影響をまとめ、その分析を作品理解に生かすことで、ディケンズ文学の核心にある視覚性に新しいアプローチを提示することを目的とする。

L. Ormondによる初めてのディケンズの画家との交流や所持していた絵画作品などの調査（"Dickens and Painting"; 1983, 84）以来、R. Lettis（*The Dickens Aesthetic*; 1989）やMark Bills（*Dickens and the Artists*; 2012）らによって、ディケンズと絵画との関係を論じる可能性は示唆されてきたものの、それらは概説的なものにとどまり、ディケンズの作品の新たな解釈やその芸術性の分析には結びつけられてこなかった。国内では松村昌家がヴィクトリア朝の小説と絵画の比較文化論を行っているが、その研究も作家と画家に共通した関心事を調査する程度に留まっている。

代表者はこれまでに、イタリア絵画との関係、オランダ・ジャンル画との関係とディケンズのリアリズムへの志向性、画家W.P.フリスへの影響と社会派リアリズム絵画の発展に及ぼした影響、ターナーの風景画の影響、の4点を論じてきた。本研究はこれらにより得られた成果をふまえ、研究期間内に以下の3ジャンルの絵画とディケンズの作品との関係を明らかにすることを目的として開始された。その3ジャンルとは(1)宗教画、(2)風景画、(3)版画である。

研究初年度である本年度は、上述(1)のディケンズと宗教画について、ディケンズの中期から後期にかけての2作の長編小説（『ドンビー父子』と『互いの友』）の中で言及のあるキリストを描いた絵の同定を行った。オーモンドは『ドンビー父子』第14章で言及されるキリストの絵を、レンブラントの版画"Hundred Guilder Print"ではないかと推測しているが（"Dickens and Painting: The Old Masters"; 1984）、1997年Dent版の編者V. Purtonはこれに関してジョシュア・レイノルズの作品ではないかと注を付しており、共通認識は形成されていない。そこで代表者は、まずパートンの推測に基づき作品内の描写に合致するレイノルズの作品を調査したが、合致した作品は見つからなかった。そこで次はオーモンドの仮説に基づいて"Hundred Guilder Print"の内容と作品の経緯をK. G. Boon, *Rembrandt: The Complete Etchings*等を参照することで調査し、その作品の構図や表現内容、創作上の意図において、ディケンズの描写の細部や小説内の場面における意図と合致することを確認した。その際特に、レンブラントもディケンズもそれぞれの作品において念頭に置いているマタイによる福音書第19章の記述や、ディケンズが『ドンビー父子』とほぼ同時代に子ども向けに執筆したキリストの生涯*The Life of Our Lord*におけるキリストの描写との類似性も検証した。また『ドンビー父子』の場面とよく似た『互いの友』第2巻第9章における場面でもキリストを描いた絵画が言及されるが、それらの場面の類似性を検討し、後者の絵画作品はベンジャミン・ウエストによる*Christ Blessing Little Children*（Royal Academy of Arts所蔵）であることを同定した。この実証的な成果をもとに、これらレンブラントやウエストの作品への言及と、ディケンズによる絵画批評で最もよく知られているジョン・エヴァレット・ミレイの『両親の家のキリスト』についての文章とを比較検討し、ディケンズの宗教画に対する考えを考察した。この論考について、「ディケンズと宗教画」という題で第38回

ヴィクトリア朝研究会で研究発表を行った。本研究成果を含む本年度完成した課程博士論文（平成25年12月提出、平成26年５月京都大学より学位授与）はオーモンド氏により出版を薦められているので今後執筆を開始する予定である。

海外学会参加報告

第17回国際仏教学会大会と第14回ヨーロッパ日本研究協会国際会議に出席して

国際仏教研究　研究員・教授　ロバート・F・ローズ

今年（2014年）の8月に、筆者は井上尚実准教授（真宗総合研究所国際仏教研究班チーフ・真宗学専攻）とマイケル・コンウェイ非常勤講師（真宗総合研究所国際仏教研究班嘱託研究員・真宗学専攻）と共に、ヨーロッパで開催された二つの大きな学会に参加する機会を与えられた。その学会とはウイーンで行われた第17回国際仏教学会大会（17th Congress of the International Association of Buddhist Studies）とスロベニアの首都リュブリアナで開催された第14回ヨーロッパ日本研究協会国際会議（14th Conference of the European Association for Japanese Studies）であった。以下、簡単ではあるが、これらの国際学会出張について報告する。

第17回国際仏教学会大会について

第17回国際仏教学会大会は8月18(月)から23日(土)の日程で、ウイーン大学を会場として開催された。国際仏教学会は仏教学関係の学会のなかでも、世界最大規模の学会のひとつであり、今回も6日間にわたって、86のパネルとセクションに分かれて、ヨーロッパ諸国やアメリカ、日本、韓国、中国、タイなど、世界各国から集まった研究者によって、約425の研究発表が行われた。初日の開会式でウイーン大学名誉教授E.シュタインケルナー博士が基調講演を行ったことも、この大会のハイライトのひとつであった。

この学会で設けられたパネル・セクションのテーマは多岐に渡り、「初期仏教」、「戒律」、「アビダルマ仏教」、「大乗仏教」、「仏教の認識論と論理学」、「タントラ」、「仏教美術と建築」、「シルクロードの仏教」、「東アジアの観音信仰」、「五台山の仏教」、「仏教とジェンダー」など、比較的「伝統的」なテーマを掲げた部会も多かったが、「資本主義と仏教」や「東アジア仏教文化における植物と食」など、従来あまり話題にされてこなかったテーマを取り上げたものもあり、とても興味深かった。しかし、ひとつの時間帯に10から13のパネルやセクションが並行して行われたため、どの部会に出るべきか、毎回悩まされた。

さて、本学の井上准教授とコンウェイ非常勤講師も、個人発表という形で、この学会で研究発表を行った。井上准教授は8月22日の午後の行われたセクション13（初期仏教 [II]、Early Buddhism [II]）で、「アーラヴィ・ゴータマとは誰なのか、あるいは何なのか—スッタ・ニパータにおけるブッダの信についての説法における修辞的装置として名」（Who or What was Āḷavi-Gotama? Names as Rhetorical Device in the Buddha's Discourse on *saddhā* in the *Sutta Nipāta*）という題目で発表を行った。このなかで井上准教授は、スッタ・ニパータ1146偈に言及されるアーラヴィ・ゴータマに注目し、それが誰（あるいは何）を指すのかについて、画像をふんだんに使用しながら詳しく論じた。「アーラヴィ・ゴータマ」とはアーラヴィーの地を訪れたゴータマとの出遇いを通じて回心し仏弟子となったアーラヴァカ・ヤッカあるいはヴァンギーサの異名である可能性が高く、またその地で釈尊が説かれた「信による彼岸への到達」の教えを指すシニフィアンとして解釈できることを指摘した。またコンウェイ非常勤講師は8月20日の午前のセクション23（大乗仏教の諸学派 [I]、Schools of Mahāyāna Buddhism [I]）と題されたセクションのなかで「道綽著『安楽集』の念仏に見られる曇鸞思想の受容と発展」（The Incorporation and Development of Tanluan's Thought on the *Nianfo* in Daochuo's *Anleji*）というタイトルで研究発表を行った。この発表でコンウェイ非常勤講師は、中国南北朝において広く主張された、念仏による浄土往生は「別時意」の語であるという説を紹介し、この説が道綽の『安楽集』のなかでいかに論破されているかについて紹介した。

第14回ヨーロッパ日本研究協会国際会議

ウイーンでの国際仏教学会が閉会した4日後、オーストリアの隣国スロベニアの首都であるリュブリアナに置かれているリュブリアナ大学において、第14回ヨーロッパ日本研究協会国際会議が8月27日(水)から30日(土)の日程で開催された。リュブリアナ大学は23の学部と5万人近くの学生数を誇る大学である。リュブリアナは今もなお中世の面影を残す美しい都市であるが、その中心に立つ重厚なたたずまいの大学本館も、とてもすばらしい建物であった。

学会自体は大学本館ではなく、近代的な文学部（Faculty of Arts）の建物を会場として行われた。ヨーロッパ日本研究協会はヨーロッパ最大の日本研究の学会であり、今大会も900人（そのうち300人は日本語教育関係者とのこと）の参加を得て、盛大に行われた。初日の開会式では柄谷行人氏が「歴史的段階としてのネオリベラリズム」（Neo-liberalism as a historical stage）と題された基調講演を行い、引き続づきスロベニア在住の日本人アーティストの現代舞踊が披露され、4日間の学会がスタートした。

ヨーロッパ日本研究協会は、日本に関するあらゆる研究分野を包括する学会であり、今回の学会も学際的パネルの部会に始まり、セクション1：都市・地域・環境研究、セクション2：言語と言語学、セクション3A：現代文学、セクション3B：前近代文学、セクション4A：美術、セクション4B：演芸、セクション5A：人類学・社会学、セクション5B：メディア、セクション6：経済・ビジネス・政治経済、セクション7：歴史、セクション8A：宗教、セクション8B：思想史・哲学、セクション9：政治・国際関係、セクション10：日本語教育という、多岐に渡る15のセクションが設けられていた。そのなかで私たちが参加したのは宗教と思想史・哲学をテーマとしたセクション8Aと8Bであった。この両セクションのうち、宗教のセクションでは、南山大学教授でJapanese Journal of Religious Studiesの編集長であるポール・スワンソン氏の基調講演を含み、11のセッションが設けられ、思想史・哲学セクションでは、末木文美士 国際日本文化研究センター教授の基調講演から始まり、同様に11のセッションが行われた。それぞれのセッションのテーマ・発表者及び個々の研究発表題目は省略するが、両セクションとも常時30から50人の参加者が集い、新鮮で興味深い発表が行われていた。

さて、私たちもアラスカ大学の阿満道尋准教授（国際仏教研究班嘱託研究員）に加わっていただき、「大谷大学パネル」を組織して、8月29日の午後に発表を行った。パネルのテーマは「二十世紀日本における親鸞像—真宗教団の内と外からの視点」（Images of Shinran in Twentieth Century Japan: Perspective from Inside and Outside the Shin Denomination）というものであった。発表者と発表題目は次のようなものであった。

ロバートF.ローズ（司会）

阿満道尋　「祖師を移す—倉田百三の『出家とその弟子』再考」（Displacing the Founder: Revisiting Kurata Hyakuzō's *The Priest and his Disciples*）

井上尚実　「現代日本思想における親鸞のリバイバル—吉本隆明、柄谷行人、今村仁司、安冨歩の場合」（The Revival of Shinran in Japanese Contemporary Thought: The Cases of Yoshimoto Takaaki, Karatani Kōjin, Imamura Hitoshi and Yasutomi Ayumu）

マイケル・コンウェイ　「大谷派の教学における宗祖像の変遷—『歎異抄』の親鸞から『教行信証』の親鸞へ」（Shifting the Image of the Founder in the Ōtani-ha's Doctrinal Studies: From Shinran of the *Tannishō* to the Shinran of the *Kyōgyōshinshō*）

以下、これらの発表について簡単に紹介する。

まず阿満准教授は、その発表で倉田百三の『出家とその弟子』を取り上げた。『出家とその弟子』の先行研究は、倉田の描く親鸞像を批評するものや真宗史および教学的観点からの批判がほとんどであったが、今回の発表ではミシェル・ド・セルトーの論理を援用して、「歴史」と「虚構」の交錯を通した『出家とその弟子』の再評価を試みた。伝統的な親鸞伝と違い、倉田は親鸞と親鸞をとりまく登場人物の心理的描写に趣をおき、「虚構」という構造を用いることによって歴史的人物が経験し得たかもしれない心理的変化を見事に表現している。一例をあげると、親鸞の善鸞への感情は歴史的史料としてほとんど記録されていないが、親鸞が一人の父親として善鸞との再会を望んでいたことがあったとしても不思議なことではない。後世において親鸞の信心が善鸞義絶事件によっていっそう深まったと美化される一方、倉田は伝統的親鸞伝に欠如していた親鸞のもちえた感情を巧みに再現している。「歴史」と「虚構」は相反するものではなく、『出家とその弟子』は「虚構」による新たな歴史的解釈を示唆していると言えるだろうというのが阿満准教授の結論であった。

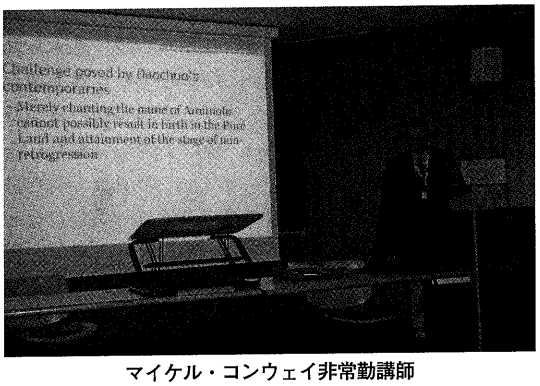
井上准教授の発表では、タイトルに挙げた4名の現代思想家のうち、今回の発表では時間の都合で最初の二人を中心にとり上げ、その親鸞像の特徴と影響について考察した。たまたま今回のヨーロッパ日本研究協会国際会議の基調講演が柄谷行人氏によって行われたこともあり、導入として彼が『倫理21』や『世界史の構造』の中で日本に初めて現れた普遍宗教として言及した親鸞思想を紹介し、そのような親鸞像の源泉として吉本隆明の「歎異抄に就いて」『最後の親鸞』の意義を、現代日本思想における親鸞の再生として論じた。

さらにコンウェイ非常勤講師は、明治後期において暁烏敏と近角常観の『歎異抄』解釈によって提示された親鸞像と、近年の大谷派の教学研究で発表されている坂東本『教行信証』の著者としての親鸞像を紹介し、その相違点と共通点について論じた。この発表では『歎異抄』と『教行信証』の違いを説明した上で、明治末期・大正期の思想界に大きな影響を及ぼした暁烏と近

角の『歎異抄』解説書のなかでは、親鸞が教化の場で直接に弟子に信仰表白をしている姿が注目されているが、その直接的な信仰告白に共鳴し追体験する暁烏と近角が、聖教とその解釈の伝統に基づいて権威を形成していた伝統宗学に対抗し、宗教体験という別次元からの権威を取得しようとしたことが提示された。そして、二一世紀初頭に焦点を移し、親鸞の思想を理解するために『歎異抄』の限界が指摘され、『教行信証』による親鸞の思想解明が進められる一方、坂東本に対する綿密な書誌学的研究成果も加わり、大谷派宗門における親鸞の像が、教化の場で弟子に直面して語る師匠から、草庵の中で聖教と向き合い、坂東本を読み返し、思索を重ねながら、それを加筆・添削する思想家へと変遷してきたと論じた。

このパネルは大会3日目（しかも金曜日！）の16：00から17：30という、あいにくの時間帯に開かれたにも関わらず、30名近くの聴衆の参加を得ることができた。また各発表後の質疑応答も活発に行われた。明治、大正、昭和の時代を通じて、日本の知識人や真宗教学者がどのように親鸞を理解し、イメージしてきたかという問題は、最近やっと研究が進められるようになってきたが、このような研究は欧米では今でも少ないと言わざるを得ない。その点で、このパネルは参加者の興味を引き、かなりの反響を得たように思われる。

今回、上記の両学会に参加して、国際学会に出席し研究発表をおこなうことは、とても大切なことであると改めて感じた。国際学会は海外の研究者と交流し、グローバルなネットワークを構築する重要な場であり、その意味で本学の国際化にもつながるからである。しかし、もっと大切なことは、海外の研究者の多くは、日本の研究者とは異なった視点や方法論、問題意識などを持っているので、日頃日本国内の学問的動向にしか触れることのない私たちに、大きな刺激を与えてくれる。今回の学会でも、日本国内の研究者にはあまり取り上げられてはいないが、仏教や日本宗教史を考えるうえで重要な視点を提供する発表が多く行われ、その意味で最先端の研究に触れるよい機会であった。今後も、若い研究者が積極的に海外の学会に参加し発表することを期待する。



マイケル・コンウェイ非常勤講師
IABS（於ウィーン大学）

大谷大学パネル（阿満・ローズ・井上・コンウェイ）
EAJS（於リュブリアナ大学）

国内研究調査報告

長徳寺蔵、清沢満之講義録の調査報告

清沢満之研究　研究代表者・准教授　藤原 正寿

清沢満之研究班では、本研究の目的である、『清沢満之全集』（岩波書店）を補完する史料を渉猟、翻刻する目的に沿って新潟県新発田市の真宗大谷派、長徳寺への調査を2014年6月27日㈮から28日㈯及び同年7月11日㈮から13日㈰の二度にわたって行った。

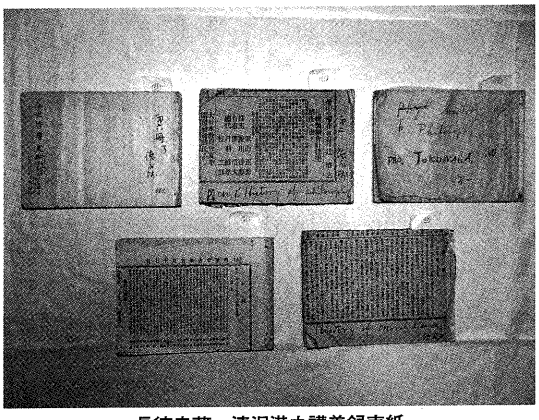
まず、6月の調査では研究代表者の藤原正寿以下、研究補助員の村上良顕、石原樹、特別派遣者として研究補助者の百武涼子の計四名が長徳寺へ赴き、関根仁応氏筆録の清沢満之講義録及び関根仁応氏宛の直筆書簡が現存する事を確認した。また、その際に長徳寺の現住職である関根正隆氏に次回の調査時に、正式に契約を締結する旨を伝え、資料（講義録）の撮影の許可をいただいた。なお、書簡に関しては教学研究所が『関根仁応日誌』（既刊七巻）を作成する際に既に撮影を行っていることから、本研究班では改めて撮影、収集することはせず、今後長徳寺ならびに教学研究所との協議の上、公にする方法を探っていく予定である。そして、この調査で現存する事が明らかになった講義録は「哲学史」、「近代史」、「今世哲学史」、「倫理学史」、「近世倫理学史」（いずれも原題は旧漢字）の五点である。五点の講義録の詳細は以下の通りである。

講義名	講義年	資料サイズ（縦×横）	丁数
哲学史	不明	17×12.5cm	36丁
近代史	不明	17×12.5cm	60丁
今世哲学史	不明	17×12.5cm	67丁
倫理学史	明治26年	17×12.5cm	67丁
近世倫理学史	明治26年	17×12.5cm	65丁

次に、講義録の撮影に向け、7月9日㈬に本研究班の嘱託研究員である教学研究所研究員の名畑直日児も参加し、響流館四階の写真撮影室1において、研究代表者の藤原、研究員の西本祐攝、研究補助者の百武とともに、研究補助員の村上、石原に資料撮影の指導を行った。西本、名畑は以前、『清沢満之全集』（岩波書店）を刊行した際の研究班に携わっており、また、藤原、名畑、百武は教学研究所の調査において、それぞれ資料撮影の経験があるため、今回の調査で撮影を行うに当たって、それらの経験をもとに研究補助員への指導を行った。ここで撮影に使用する機材の不足が発覚したが、調査が二日後に迫っていたため、購入できるものは真宗総合研究所名義で購入し、間に合わないものは教学研究所の厚意により貸していただくことになった。

さて、長徳寺での資料撮影であるが、この撮影には前回同様、研究代表者の藤原、研究補助員の村上、石原、研究補助者の百武が参加した。撮影当日（7月12日）の作業は長徳寺の一室において行ったが、照明を落とし、さらに日光を遮断して、環境を暗室に近づけ、白布を敷いた台にコピースタンド（照明）を取り付け、一丁ずつ撮影するというように資料を長期にわたって保管するということを念頭に置きながら、慎重に進められた。作業は9：30から17：30という長時間にわたってのものであったが、大きな混乱も無く順調に進められた。撮影した資料は当日の夜、持参していた真宗総合研究所名義のパソコンに取り込み、文字が読めるかなどの簡易的なチェックを行い、特に不備が見当たらなかったため調査は終了した。また、この調査で契約書を持参し、契約を締結する予定であったが、直前になって書類の不備が見つかったため、急遽先方の許可を得て、後日郵送にて契約を締結した。

現在、撮影した資料の翻刻を研究補助者の百武及び工藤克洋を中心に、鋭意行っている。具体的には8月上旬に百武及び工藤に撮影してきた写真データを渡し、数ページを翻刻。研究補助員の村上、石原が数ページの



長徳寺蔵、清沢満之講義録表紙

翻刻されたデータと既に刊行されている『清沢満之全集』(法藏館)、『清沢満之全集』(岩波書店)や以前の研究班において翻刻され、現時点で公にされていないデータとの照合を行うというものである。この翻刻作業を行っていく中で、今回長徳寺において調査、撮影した関根仁応氏筆録の清沢満之講義録は、以前に発見されていた講義録(『清沢満之全集』第五巻(岩波書店)等に所収)とは別のものである可能性が高いことが判明した。これらのことから、本講義録は今後の清沢満之研究において重要な意味を持つ資料となりうる事が期待されており、引き続き翻刻作業を行っている。

公開講演会・公開研究会

国際仏教研究 公開講演会
講題：欧米に所蔵されるタイ写本に関する最近の調査研究
講師：Justin McDaniel（ペンシルバニア大学准教授）

国際仏教研究　研究補助員　梶　哲也

6月24日㈫16時20分より大谷大学響流館３階マルチメディア演習室において、ペンシルバニア大学准教授のJustin McDaniel先生をお招きし、「欧米に所蔵されるタイ写本に関する最近の調査研究」という講題のもと、真宗総合研究所国際仏教研究班の2014年度前期公開講演会が開催された。先生はタイの美しい彩飾写本の画像をプロジェクターで示しながら英語で講演され、その後に聴講者と活発な質疑応答を行った。

McDaniel先生は、タイの彩飾写本がシャム/タイ王国の黄金時代における文学的、芸術的、宗教的な傑作であり、世界中の様々な文化において制作された写本の中でももっとも素晴らしいものの一つであり、人文科学上、重要な意味を持つと指摘された。これらの写本は教育上の教材、外交・王政上の取引対象、科学的研究の描写や、宗教上の聖歌や劇形式の上演といった芸術表現として使用された他、財政、法律、学問上の記録としての役割も果たした。また写本の制作は、タイで現在も行われている伝統的な文化の１つでもある。

今回の講演では更に、McDaniel先生によって18世紀のタイの彩飾写本におけるいくつかの非常に面白い実例が紹介された。これらの写本の内容は多岐にわたっており、仏教経典やアビダルマの論書、医学、法学、文法、年代記、音楽、神話、動植物学などの他、一見関係のないようなテキストが１つにまとめられたものや順序が並び替えられたものもある。文字に関してもパーリ語だけでなく土地言語で記されているもの、１つの写本に様々な言語や書体が混在しているものなどがある。また、写本の余白に描かれている挿絵にも面白い特徴がある。例えば、アビダルマ論書が書かれた写本の余白にジャータカの有名なシーンの挿絵が描かれるというように、写本の内容と挿絵の描写が一致しないものも多く、飲酒する僧侶や中国の戯曲のシーン、デッサンの練習と思われるようなものが描かれることもあり、これらがどのような意図を持って制作されたのか興味を惹かれる。

先生は今後の研究課題として、タイの彩飾写本の内容や挿絵そのものに関する研究だけでなく、その使用方法や制作の目的に関しても研究しなければならないと指摘された。また、写本は世界中の博物館や個人コレクションに拡散しており、目録が作成されずに未整理なままのコレクションも多いため、これらの写本の内容を同定、整理をする必要がある。このことから、先生はタイ写本研究と平行して、2009年よりヨーロッパや北米のアーカイブやコレクションの協力のもと、これらの機関に所蔵されているタイ写本を電子的に保存し、the University of Pennsylvania Librariesを本拠地とするThai Digital Monastery and Manuscript Archive (TDMMA)を通じて、インターネット上に公開するための活動されている。これはPrinceton University Library、the Free Library of Philadelphia、The Walters Art Museum in Baltimore、the Asian Art Museum in San Francisco、Penn Museum、the Chester Beatty Library in Dublinとの共同企画として行われており、将来的にはTDMMAのホームページを通じて、世界中の様々な機関が所蔵する素晴らしいシャム/タイの彩飾写本を自由に検索し読むことができるようになる予定とのことで非常に楽しみである。

公開講演会 於 マルチメディア演習室

公開講演会・公開研究会

学術協定に基く共同研究
モンゴル国立大学社会科学部歴史学科長・
デルゲルジャルガル先生の公開講演会　開催報告

西蔵文献研究　研究員・准教授　武田和哉

本学真宗総合研究所とモンゴル国立大学社会科学部（現在は科学学部と改称）との学術交流協定に基く共同研究活動は、今年で２年目となり、昨年度のM.ガントヤー先生に引き続き（このご来日の際に行われた講演内容は『真宗総合研究所研究紀要』第31号にて報告済み）、今年度は歴史学科長のP.デルゲルジャルガル先生を本学にお招きし、共同研究を実施した。

その際には、下記の日程において公開講演会を開催したので、以下に報告する。

１．公開講演会開催の日時と場所

2014（平成26）年６月25日　午後４時30分～６時

大谷大学真宗総合研究所内・会議室（響流館４階）

２．講演者とテーマ

P.デルゲルジャルガル先生　「トルコ民族国家時代のモンゴル諸集団の出自と比定（紀元６～10世紀）」

３．講演会の概要

デルゲルジャルガル先生は、モンゴル民族出現以前の北アジア地域における遊牧民族の歴史をご専門にされており、この日のご講演の内容は、鮮卑系民族の興亡を受けて現在のモンゴル高原に成立した柔然や、それに続く突厥、回鶻などのトルコ（テュルク）系の民族と、その後に現れるモンゴル民族との系譜関係の解明を大きな研究課題として認識しておられる。この問題は以前より多くの研究者が取り組んできたものの、手掛りとなる資料が少ないという制約もあって、困難な歴史学上の課題とされている。

講演の中で、デルゲルジャルガル先生はモンゴル族に残されている族祖伝承である「エルグネ＝クン」伝説や、中華側の歴史史料にみられる室韋・蒙兀などの集団名称等を手がかりとしつつ、各集団間の関係や歴史的系譜を丹念にたどられて、突厥の碑文に見えるタタル民族に着目しつつ、モンゴル帝国期までの諸民族の動向に関して、ひとつの試論を提示なされた。断片史料の丹念な分析と着実な考証に立脚した論旨に対して、参加者側の関心はすこぶる高く、数多くの質問や意見が寄せられるなど、総じて活発な意見交換の場となった。

また、講演会終了後は、真宗総合研究所主催の懇親会が開かれ、ここでも参加者による研究交流等がなされた。

４．講演会の主要な参加者の氏名

松田孝一（大阪国際大学名誉教授）、大澤孝（大阪大学大学院言語文化研究科教授）、村岡倫（龍谷大学文学部教授）、白玉冬（内蒙古大学蒙古学学院副教授）、B.ボルマー（佛教大学）〔以上は外部からのご参加の方〕

松川節（真宗総合研究所所長・本学人文情報学科教授）・浅見直一郎（本学歴史学科教授）・福田洋一（本学人文情報学科教授・西蔵文献研究班研究代表者）・渡邉温子（本学大学院博士後期課程・西蔵文献研究班研究補助員）、ラモ・ジョマ（本学大学院博士後期課程・西蔵文献研究班研究補助員）・武田〔以上は大谷大学内からの参加者〕

デルゲルジャルガル先生（左）と通訳を担当した松川所長

公開講演会の状況

共同研究調査報告

学術協定に基く共同研究
モンゴル国立大学社会科学部との学術交流協定に基く
モンゴル国内仏教寺院址に関する共同調査・研究について

西蔵文献研究　研究員・准教授　武田和哉

本学真宗総合研究所とモンゴル国立大学社会科学部との学術交流協定に基く共同研究活動は、今年で２年目を迎えた。本節では、モンゴル国内で実施した仏教寺院址に関する共同調査の概要について、以下の通り報告する。

１．日程

現地調査：2014（平成26）年４月25日～５月１日

モンゴル国立大学との共同研究：同年５月５日～７日

２．現地調査・共同研究活動の参加者

松川節（真宗総合研究所長・教授）

武田和哉（准教授／現地調査のみ参加）

U.エルデネバト（モンゴル国立大学社会科学部教授）

３．調査行程の記録

４月25日　早朝、松川・武田は関西空港に集合して出発し、韓国仁川空港経由にて夕刻ウランバートル国際空港に到着した。そして、モンゴル国立大学関係者の出迎えを受けて無事にホテルに投宿した。この日のウランバートルは、到着直前まで霙混じりの悪天候であったとのこと。着陸直前の航空機内からは、茶色に冬枯れした草原の各所に白く雪が積もっている様子が視認できた。

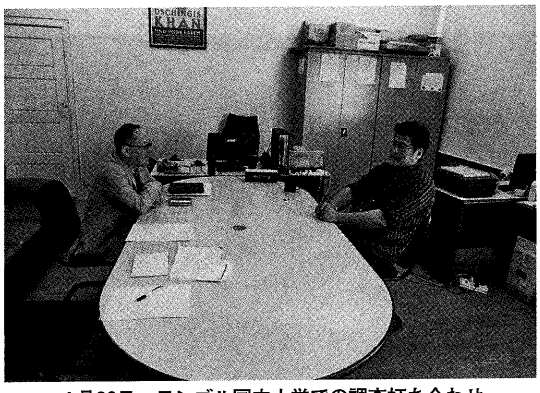
４月26日　午前、昨年度の共同調査でご一緒したウランバートル市内の古刹ガンダン寺の学術文化研究所長であるSh.ソニンバヤル師が我々の滞在先までお越しになり、昨年度調査の後の研究成果などをご提示頂いた。

昼食の後、14時にモンゴル国立大学にエルデネバト氏を訪問し、翌日からの調査についての打ち合わせなどを行った。夕方、ホテルに帰着後にモンゴル科学アカデミー・考古研究所研究員のB.ツォクトバータル氏が来訪され、情報交換を行った。ツォクトバータル氏は、翌日より調査予定のヘンティ県のご出身であり、現地の最新事情や道路状況等について有益なご指南を頂いた。

４月27日　８時にホテルを出発し、モンゴル側が手配した車輌にコックを帯同して、ヘンティ県方面に向かう。ヘンティ県はウランバートルの東方に所在し、チンギス・カンの出生地としての伝承が色濃く残る地域である。

昼過ぎてようやくヘンティ県内に入り、途中から幹線道路より外れ、契丹文字が刻まれた磨崖碑や契丹時代の城郭址・時期不明の鹿石・元朝期の石人等の史跡を踏査の後、19時過ぎに県都のチンギス・ホト（ウンドゥルハーンから改称）に到着し、市内のホテルに投宿した。

４月28日　９時前にホテルを出発し、ヘルレン河左岸をさらに東方に向かう。市内を出て暫くして完全な未舗装路となり、車が大きく揺れる。途中、草原の中で昼食を摂って、さらにひたすら悪路を走り続け、ようやく15時前に本日の目的地であるヘルレン・バルス・ホトⅠ城址に到着した。この城址は、契丹時代に築かれた中華式の方形土城であるが、形状は完全な方形ではなく、台形



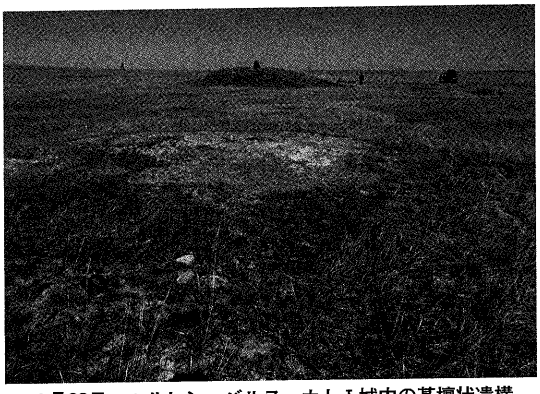
４月26日　モンゴル国立大学での調査打ち合わせ

４月27日　チンギス・ホト郊外にある石人

様の不規則な形を呈している。城外のすぐ東側には契丹時代の塼塔が現存している。往時、契丹の領域内には多くの方形土城・寺院・塼塔が営造され、現在も中国の遼寧省・内蒙古自治区・河北省・北京市などに数多く残っている。ただし、モンゴル国内に現存する塼塔はここのみであり、その意味では大変貴重な遺構である。

到着後、まずはヘルレン・バルス・ホトⅠ城内部の踏査を実施した。既に、19世紀にロシア人により存在が把握され、戦後もモンゴル人のKh.ペルレーによる踏査報告があり、それによると城内にはさらにもう1基の塼塔があったとの記述がある。果たして、今回我々が城内を踏査したところ、城内のほぼ中央部付近でその塔址と思しき址を確認するに至った。やはり契丹時代の塼塔によく見られる八角形様の基壇が残存しており、周囲に大量の塼が散乱していた。この他、隣接地にも複数の基壇状遺構があり、少なくとも1箇所についてはチベット仏教寺院の建物址と推測される石積列の遺構が残されていた。続いて、城外の塼塔の踏査を実施した。塼塔は八角形で、南東面が大きく破壊され、内部に立ち入れる状態であった。内部に入ると、上部の塔刹部分まで見通せる構造になっており、途中には木柱がいくつか存在していた。恐らく、内部に建築された構造物の部材ではないかと思われる。この木柱は外面からも観察できるので、建築の構造や技法等を知る大きな手がかりでもあろう。

4月28日　ヘルレン・バルス・ホトⅠ城外　塼塔の現況



4月28日　ヘルレン・バルス・ホトⅠ城内の基壇状遺構

なお、この塼塔に関しては、未だに詳細な立図面が存在していないため、今回の調査では武田が日本から持参したブローニー判カメラを使って立面のステレオ写真撮影を行い、帰国後に航測会社に委託して図面化することに成功した。その結果、塔高が約17m（塔頂部の柱材も含む）である事も判明した。

塼塔址の調査および写真撮影の後は、草原内の幕営地で、雄大な景色の中での日没を見ながらの夕食となった。夜間は思ったほど冷え込むことはなかったものの、この近辺に発生していたダニには悩まされることとなった。

4月29日　朝9時より、昨日やり残した塼塔の写真撮影を続行し、10時過ぎに終了した。その後、さらに東に向かい近辺に所在する土城などの遺跡踏査を行った。

昼食後、チンギス・ホトに戻るべく、再度悪路をひたすら走る。18時過ぎに到着して、ホテルに投宿した。

なお、ヘルレン・バルス・ホトⅠ城址への往復が悪路のため予想以上に時間を要したため、この夜のミーティングで翌日以降の調査行程の再精査を行い、当初予定のヘンティ県内の別寺院の調査は時間的に困難との結論に達した。よって、翌日はチンギス・ホト市内にある博物館とチベット仏教寺院の訪問に切り替えることにした。

4月30日　朝9時過ぎにホテルを出発して、まず市内にあるヘンティ県博物館を訪問し、バトトヤー館長から館内の資料等についての説明を受けた。博物館は清代のモンゴル王公の邸宅址を利用したものであり、展示資料も清代以降のものが大半を占めていた。昼食後は、グンドゥガワルリン寺を訪問した。折しも、ハン

4月30日 ヘンティ県博物館の見学（中央はバトトヤー館長）

ボ・ラマであるCh.ゴムボスフ師がおられ、当寺の由緒や近年の当地域での仏教活動の状況などについて、お話を伺うことができた。

この後14時半に当寺を出発して、幹線道路を一路ウランバートルに向かい、20時前にホテルへ到着した。

5月1日　早朝6時にホテルを出て、ウランバートルの北北西約220kmの、セレンゲ県内に所在するアマルバヤスガラント寺を日帰りで往復する強行日程となった。幹線道路から枝道に入った後、橋のない河を渡渉する箇所もあるような悪路だったが、何とか12時前には同寺に到着した。この日は強い寒波が到来し、時折小雪の舞う中で調査を開始した。

同寺は雍正帝の勅建寺で、ジェブツンダンバ二世の関与と選地により1736年にこの地に立てられた。現在中国河北省承徳に所在する外八廟のチベット仏教寺院の規模にも匹敵する寺観を擁しており、果てしない草原の谷奥に突如として現れた様は、ある種圧巻でもあった。残念ながら、共産党政権時代に破壊を受けたが、近年に至り、日本の東京文化財研究所などの協力等を得て修理活動がなされている。訪問した際には、敷地内には修理用の瓦や資材が多く運び込まれて集積されており、夏の活動に向けての準備がなされていた。訪問時には、生憎大半の僧侶が所用にて不在とのことで、居合わせた若い僧侶から、同寺の由来や現状等の説明を聞くことができた。

14時前に、ひととおりの調査を終え、寺の前で昼食を摂り、15時には出発した。再び同じ道を戻り、ウランバートルのホテルに帰りついたのは20時半であった。その後、帯同したドライバーとコックの労をねぎらい、賃金等の支払いや今後の調査成果の取りまとめなどに関する意見交換のミーティングを行い、現地調査が終了した。

5月2日　この日、武田は帰国のため、朝6時にホテルを出発し、ウランバートル国際空港より韓国仁川空港経由で、夕刻には関西空港に無事帰国した。一方、松川は5月2日～4日まで、別の科研用務に従事した。

5月5日　松川はモンゴル国立大学を訪問し、B.ボルドギブ科学学部長を始めとする関係者と懇談した。このとき明らかになったことだが、モンゴル国立大学では学部学科の大規模な統廃合が進行中であり、従来の14学部が5学部に統合され、新設の科学学部に自然科学科、人文科学科、社会科学科の3学科が設置された。ボルドギブ学部長とは、真宗総合研究所との協定に基づく交流を従来通り推進していく点を確認しあった。さらに、国際モンゴル連盟事務局（D.トモルトゴー事務局長)、モンゴル研究国家委員会（D.ザヤーバータル事務局長)、在モンゴル日本国大使館等を訪問し、大谷大学真宗総合研究所で推進中のモンゴル研究などについて意見を交換した。

5月6日　松川はウランバートルから北京に移動し、中央民族大学蒙古語言文学部のチョクト学部長をはじめとする関係者と懇談し、モンゴル仏教研究に関する情報交換を行った。

5月7日　松川は北京より関西空港に無事に帰国し、これによって現地調査・共同研究活動の双方の日程がすべて終了した。

4．まとめ

今回の調査は、四月という時期にしては、比較的天候には恵まれ、ヘンティ県での調査は温暖な気候のもとで行われた。ただし、当初の想定以上に道路状況が整わず、結果として行程に変更が生じることとなった。

それでも、ヘルレン・バルス・ホトⅠ城の契丹時代の塼塔、およびアマルバヤスガラント寺の調査においてはいろいろな知見が得られ、総じて収穫の多い調査・訪問となった。これらの調査・研究成果は、来年度に開催が計画されている共同シンポジウムにて報告の予定である。

4月30日 グンドゥガワルリン寺のCh.ゴムボスフ師との面談

5月1日　アマルバヤスガラント寺の様相

全国大学史資料協議会研究会報告

全国大学史資料協議会西日本部会 2014年度　第1回・第2回研究会に参加して

大谷大学史資料室　研究補助員　松岡智美

大谷大学史資料室では、所蔵している大学史関係資料の保存や公開、活用方法を他大学から学ぶために、毎年、全国大学史資料協議会西日本部会に参加している。2014年度は第1回研究会と第2回研究会に参加する機会を得た。

第1回研究会は、5月22日(木)に大阪商業大学にて開かれ、明尾圭造氏による「大学における社会貢献について―商業史博物館のアーカイブと地域連携をもとに―」と題した講演の後、大阪商業大学図書館や谷岡記念館（学園資料室、商業史博物館）、アミューズメント産業研究所の見学が行われた。公演の中で、明尾氏は、学内に向けては、授業の一環で博物館を使用することによって自校教育を担い、学外に向けては、新聞への博物館紹介記事の掲載や地域のサークルセンターとの共同企画展の開催による地域と連携した情報発信などを例に、博物館の活動を通した社会貢献のあり方について話された。

第2回研究会は、7月8日(火)から9日(水)の2日間にわたって、広島大学にて開かれた。8日は下記のプログラムで行われた。

1．開会挨拶
2．来賓祝辞
3．基調講演
　小池聖一氏（広島大学文書館長）
　「大学文書館像の再構築
　　～広島大学文書館を一例に～」
4．パネルディスカッション
　テ　ー　マ：「これからの大学文書館」
　パネリスト：大濱徹也氏（筑波大学名誉教授）
　　西口　忠氏（桃山学院史料室）
　　武田知己氏（大東文化大学教授）
　司　　会：小池聖一氏
5．閉会挨拶

9日は広島大学文書館の施設見学が行われた。基調講演で小池氏は、広島大学文書館の現状や情報資源の蓄積を担う機関アーカイブズとしての役割、情報資源の収集を担う収集アーカイブズを始めとしたトータル・アーカイブズとしての活動などについて話された。また、パネルディスカッションでは、大学文書館が置かれている現状や今後の活動方針など、現在から未来を見据えた大学文書館のあるべき姿について活発な議論が交わされた。このパネルディスカッションの質疑応答では、公文書と大学文書館の役割についての言及がなされ、保存、公開、活用を前提とした会議の全文議事録などの公文書の管理においては、対象となる文書を作成した課との約束を守り、秘密を共有し、公開の際は文書館が責任を持って行うなどの提言がされた。

これらの研究会に参加して改めて実感したのは、大学史資料室が主体となり、学生に大学の理念を伝える活動によって、自校教育の一翼を担うこと、また、展示などの対外的活動を通して、学内だけでなく学外にも目を向けて、大学史関係資料の掘り起こしや調査を進めていくことの必要性を感じた。

現在、当資料室では、学内各課の協力を得て、主に図書館未寄贈資料を中心とした冊子やパンフレット、ノベルティーなどの学内発行物の調査を行っている。学内発行資料は、その時々の大学の校風や状況、学生生活を物語る貴重な資料であり、大学のあり方を検証する上では欠かせないものである。そこで、上記研究会の成果を参考にして、資料の取り扱いに関する当資料室と各課との連携や信頼関係の構築などを進めるとともに、散逸する恐れのある資料を把握し、永く保管できる体制を確立することにより、将来に向かって大学の歩みを残していくことを今後の目標としたい。

第2回研究会のパネルディスカッション

真宗総合研究所彙報　2014. 6. 1～2014. 10. 31

■研究所関係

◎真宗総合研究所委員会

◇6月25日(水)　12時20分～（博綜館5階第4会議室）

1.「指定・一般研究」等人事について

2. 借用資料管理の適正化について

3.「指定研究」西蔵文献研究の研究班について

4. その他

◇7月22日(火)　12時20分～（博綜館5階第4会議室）

1.「指定研究」西蔵文献研究の研究員人事について

2.「指定研究」西蔵文献研究の研究補助員に関する研究組織変更について

3. その他

◇9月24日(水)　12時20分～（博綜館5階第4会議室）

1. 研究組織の変更について

2. その他

○研究所委員会ワーキング部会

◇6月10日(火)　12時15分～（博綜館4階会議室）

1. 借用資料管理の適正化について

2. その他

◇6月17日(火)　12時15分～（博綜館4階会議室）

1. 借用資料管理の適正化について

2. その他

○2014年度研究補助員（RA）雇用契約事務説明会

◇6月5日(木)　12時20分～（真宗総合研究所ミーティングルーム）

1. 研究補助員（RA）雇用契約の締結について

2. 研究補助業務に関する事務説明

3. その他

○2014年度第1回研究者総会

◇7月25日(金)　18時～（Big Valley Cafe）

教如上人研究

研究の研究課題は、「真宗大谷派・東本願寺開祖である教如上人に関わる史料の調査と研究」である。

はじめに本研究の意義と目的について梗概を述べておく。まずもって、真宗大谷派・東本願寺開祖の位置にある教如上人（永禄元年［1558］～慶長19年［1614］）の研究は、「大谷派なる精神」、大谷派存立の理念と存在理由を明らかにする意義を有している。こうした意義を持つ本研究であるが、具体的には、教如上人に関する史料の全面的・組織的な調査を実施し、それらを体系的に整理して、将来的には出版・公刊し、広く内外に成果を問うことを目的としたい。

折しも2013（平成25）年は、教如上人の四百回忌法要が真宗本廟および各地で執行され、教如上人に対する関心が高まっている。また、そのなかで教如上人に関する新史料の発見も相次いでおり、調査研究の好機であると考えられる。真宗史研究の領域でも、『教如と東西本願寺』（同朋大学仏教文化研究所編　2013年）などの研究成果が公刊され、教如上人研究の重要性が学界においても再認識されつつある。このように教如上人研究への関心が高まっている機会を捉え、教如上人に関わる史料の収集・調査・研究を行うことを本研究の課題とするものである。

次に、本研究の研究計画と方法についてであるが、本研究の中心は、教如上人に関する史料の調査を行うことである。教如上人の生涯を明らかにする同時代史料をはじめ、伝記史料、理念に関わる教学的史料、東本願寺別立・教団形成過程を解明する史料など、教如上人に関わる全史料を調査の対象とする。具体的には、1. 教如上人授与物（本尊・名号・開山御影以下の五尊。寿像など）、2. 消息・書状、3. 聖教文言掛幅、4. 開板聖教（正信偈三帖和讃・御文など）、5. 言行を伝える覚書・日記類などが、その対象となる。

これら一次史料の他に、後世の伝記史料のような二次史料も調査対象に含まれるが、まずは、上記1～5の一次史料を対象として、史料所在データベースを作成することから着手し、それと並行して調査・研究を進めていくこととしたい。これらの調査・研究を踏まえ、従来の教如上人研究でも未解明であった課題について、明らかにしていくことができれば、と考えている。

研究班の活動内容

以上の課題と目的をもって、2014年4月以降、研究班として活動を行ってきた。研究会及び打ち合わせを以下の日程で開催した。

第1回　研究会

日　時：4月18日(金)　午後4時30分～6時

場　所：響流館マルチメディア演習室

テーマ：「教如論の問題点と史料の調査・収集・研究」

講　師：大桑斉氏（大谷大学名誉教授）

内　容：大桑斉名誉教授より研究班の課題、具体的な作業内容について提案をいただいた。教如に関する史料研究の現状と課題について『教如と東本願寺』（前出）の諸論考を手がかりとして、①根本的問題－なぜ教如

は東本願寺を開いたか、②支持基盤－地域共同体論と一揆論、③石山合戦期、④大坂拘様、⑤秘回期、⑥豊臣政権との関わり、⑦家康との関わり、⑧妙安寺祖像の遷座、⑨その他、言及がなかった問題点（豊臣政権の宗教政策との関わり、大名による弾圧の問題－なぜ弾圧か、以上９点の視座から、同書の内容を批判的に検討し、研究班として解明すべき残された課題について指摘された。

以上の課題解明を大きな目標に据えながらも、まずもって本研究班としての基礎的な作業として公刊書類に掲載されている教如関係史料の検察の必要を指摘され、具体的に調査すべき公刊書や資料類の主なものとして、公家日記、茶会記録、自治体史・展覧目録・寺史類・地誌類所載の教如文書・関連坊官文書・大名文書・寺院由緒書・教如下付物（寿像・影像裏書・名号・・浄土文類聚鈔・正信偈・御文）・滞在下向伝承などが提示された。

こうした具体的な提案内容について、参加者との質疑応答、及び研究班として取りかかるべき順序等についての検討をし、今後の作業の具体的な進め方について相談をした。

第２回　作業概要の打ち合わせ

日　時：５月23日㈮　午後４時30分～６時

場　所：真宗総合研究所フリースペース

内　容：川端研究員から、「作業概要打ち合わせ」と題して、具体的な作業内容についての提案がなされた。前回（４月18日）の大桑斉名誉教授からの提案を受けて、消息集については『教如上人御消息集』、「信長と講和及大坂退城関係文書」（『続真宗大系16』）、「教如上人消息」（『真宗史料集成６』）の３書を検索し、①対照表を作成し、さらに②消息の所蔵確認と写真収集を行うことにすること。また、自治体史・寺史・地誌・図録等・公家日記類・茶会記録・別院史料の調査及び開版聖教・慈敬寺文書・妙安寺文書などについても検討するとの方針が示された。

最後に、以上の調査対象に関して、必要なデータ（年月日・資料名、差出、宛名、所蔵、出典等）をエクセルに入力する方法を確認した。作業は、学外及び大学院生アルバイトが担当し、まず『教如上人御消息集』、『補遺教如上人御消息集』、『補遺教如・宣如両上人御消息集』、『続真宗大系16』、『真宗史料集成６』、『国文東方仏教叢書消息部教如』を取り上げて作業に取り組むことを確認した。

第３回　研究会

日　時：10月１日㈬　午後４時半～６時

場　所：真宗総合研究所ミーティングルーム

内　容：

１：川端研究員の報告

「教如上人関連史料の整理と検討」

前回（５月23日）での作業概要の打ち合わせを踏まえて進められてきたこの間の作業の進捗状況について、川端研究員より報告がなされた。具体的には、以下の通りである。

①作業状況について：目下、教如関係一次史料の網羅的収集、整理、データベース化を目指して作業中であり、約350の自治体史や史料集、図録類のうち入手可能なものから取りかかっている。現在は約50の刊本類について作業を終え、データ件数は250以上になっている。入力内容は、親番・小番・通番・年月日・西暦・史料名称・差出・宛所・所蔵者・所収書書誌・文書番号・頁数・備考・法量・本文行数・写真の有無・担当者などの項目である。現在の作業を継続しつつ、今後は、大谷大学図書館・博物館所蔵の消息集関係などについても内容確認と複写、データベース化の作業を進めていく必要がある。また、本文の翻刻も行っており、同内容の史料を複数翻刻することで、翻刻ミスや読みの間違い、全く同一の史料かどうかを判断することが出来るというメリットがあるとの指摘がなされた。

②教如上人御消息集等の作業から：『教如上人御消息集』、『補遺教如上人御消息集』、『補遺教如・宣如両上人御消息集』、『続真宗大系16』、『真宗史料集成６』、『国文東方仏教叢書消息部教如』など、教如上人の消息関係がまとめられている刊本を調査したが、今回の作業により、諸種の消息集の相互関係（重複・欠如等）について知ることが出来た。また、この作業を通じて、他の刊本資料類で紹介されているものや近年発見されたものなどを含め、多くの教如消息が存在することが分かった。教如関連史料については、新たな情報提供を得ながら、調査を検討していく必要がある。

③下付物から見えるもの：教如上人が各地に下付した物（教如寿像・顕如寿像・親鸞御影・証如御影・名号類）についても、同じくエクセルでのデータベース化作業を実施した。またその下付地域、時期等をめぐっては今後の検討が必要であるとした。

④史料紹介：史料紹介として新出の和讃付書十字名号・同九字名号について説明がなされた。以上の川端研究員の報告を受けて、質疑応答及び今後の作業の進め方やその内容について検討した。

２：教如関係史料情報の共有
平野研究員より新たに情報が得られた教如関係史料（一行書）について紹介があった。

おわりに

研究班の作業状況は、上記の通りである。作業は始まったばかりであるが、上記作業を継続的に実施してまいりたい。今後は、徐々に作業のペースも上がるものと考えている。加えて、刊本類や図録に掲載されていない未発見の教如関連史料を発掘しつつ、また入手した史料に関する情報に基づきながら、必要に応じて研究班として現地調査を行っていく予定である。

清沢満之研究

《ミーティング》

◇第１回ミーティング
日　時：５月15日㈭　13：00～14：00
会　場：真宗総合研究所ミーティングルーム
議　題：年間スケジュールおよび研究体制について

◇第２回ミーティング
日　時：９月29日㈪　12：10～13：00
会　場：真宗総合研究所ミーティングルーム
議　題：研究活動報告および今後の活動予定について

《出　張》

◇６月27日㈮・28日㈯
場　所：真宗大谷派長徳寺
目　的：関根仁応宛の清沢満之の書簡、および清沢満之講義録等の研究調査

◇７月11日㈮～13日㈰
場　所：真宗大谷派長徳寺
目　的：関根仁応宛の清沢満之の書簡、および清沢満之講義録等の整理・資料撮影

国際仏教研究

〈英米班〉

《会議・研究会》

◇*Cultivating Spirituality* 出版記念シンポジウムの打ち合わせ
①６月６日㈮　14：00～16：00
（於　真宗総合研究所内ミーティングルーム）
②６月７日㈯　10：00～12：00
（於　響流館４階 EBSオフィス）

◇『浄土の真宗』英訳研究会
①６月25日㈬　10：40～12：10
（於　真宗総合研究所内ミーティングルーム）

◇第14回ヨーロッパ日本研究協会（EAJS）国際会議大谷大学パネルのための研究会
①７月２日㈬　10：40～12：10
（於　響流館４F会議室）
②８月１日㈮　12：00～13：00
（於　真宗総合研究所内ミーティングルーム）
2015年度 IAHR 参加打ち合わせ

〈海外学会参加・研究発表〉

◇第17回国際仏教学会（IABS）大会
８月18日㈪～23日㈯　於　ウィーン大学
ロバート・F・ローズ研究員、井上尚実研究員、マイケル・コンウェイ嘱託研究員

◇第14回ヨーロッパ日本研究協会（EAJS）国際会議
於 リュブリアナ大学（スロベニア）
８月27日㈬～30日㈯
ロバート・F・ローズ研究員、井上尚実研究員、マイケル・コンウェイ嘱託研究員、阿満道尋嘱託研究員。
大谷大学パネル発表「二十世紀日本における親鸞像—真宗教団の内と外からの視点」（Images of Shinran in Twentieth Century Japan: Perspective from Inside and Outside the Shin Denomination）

《公開講演会》

①６月24日㈫　16：20～17：50
（於　響流館３F　マルチメディア演習室）
講師：ジャスティン・マクダニエル氏
（ペンシルバニア大学准教授）
講題：欧米に所蔵されるタイ写本に関する最近の調査研究

②10月31日㈮　16：20～17：50
（於　響流館３F　マルチメディア演習室）
講師：アーロン・A・プロフィット氏
（ミシガン大学 博士論文提出資格者）
講題：中世仏教における「秘密念仏思想」：阿闍梨道範と密教浄土教文化

〈ベトナム班〉
《研究打合せ》
◇2014年8月7日(木)
『日本仏教概説』(仮称)執筆のための連絡会を開催した。執筆において重視する視点と方向性について意見交換した。出席者は、織田顕祐・ロバートF.ローズ・宮崎健司、平野寿則、福島栄寿、箕浦暁雄。川端泰幸は都合により欠席。後日別途意見交換した。

◇2014年9月18日(木)
ベトナム仏教研究の方向性に関して包括的意見交換を行った。出席者は、織田顕祐・浅見直一郎・箕浦暁雄・桃木至朗(大阪大学教授)・福島重(龍谷大学研究員)。

西蔵文献研究
《外国人研究者招聘》
◇6月22日(日)〜29日(日)
デルゲルジャルガル氏(モンゴル国立大学社会科学部歴史学科長・西蔵文献嘱託研究員)
招聘理由:チベット仏教伝来以前のモンゴル高原地域での諸民族の活動の諸相および仏教受容の可能性について共同研究および意見交換

《嘱託研究員招聘》
◇5月19日(月)〜20日(火)
西沢史仁氏(西蔵文献研究班嘱託研究員)
招聘理由:『サンプ明鏡史』の校訂テキストと訳注出版のための打ち合わせ

◇5月25日(日)〜26日(月)、及び6月26日(木)〜27日(金)
高本康子(西蔵文献研究班嘱託研究員)
招聘理由:『寺本婉雅日記』の翻刻作成に係る実物資料実見および打ち合わせ

《公開講演会》
◇6月25日(水) 16時30〜(大谷大学響流館4階 会議室)
デルゲルジャルガル氏(モンゴル国立大学社会科学部歴史学科長・嘱託研究員)
「トルコ民族国家時代のモンゴル諸集団の出自と比定(紀元6〜10世紀)」

《研究打ち合わせ》
◇5月13日(火) 9時15分〜
(真宗総合研究所ミーティングルーム)
議題:研究業務の進捗状況の確認

◇6月10日(水) 9時15分〜
(真宗総合研究所ミーティングルーム)
議題:研究業務の進捗状況の確認

大谷大学史資料室
〈研究会参加〉
全国大学史資料協議会 西日本部会 2014年度 第2回研究会
日 程:7月8日(火)〜7月9日(水)
場 所:広島大学 学士会館 レセプションホール(東広島キャンパス)
広島大学文書館(東広島キャンパス)
参加者:藤田義孝・松岡智美

全国大学史資料協議会 2014年度総会ならびに全国研究会
日 程:10月8日(水)〜10月10日(金)
場 所:桃山学院 昭和町キャンパス
カンタベリー記念館 カンタベリーホール
大阪大学 豊中キャンパス 大阪大学会館 講堂
適塾・杏雨書屋
参加者:松岡智美

〈ミーティング〉
7月1日(火) 13:00〜14:00
出席者:藤田義孝・戸次顕彰・松岡智美
場 所:真宗総合研究所
内 容:業務報告と今後の活動、ならびに大谷大学図書館における大学史スポット展示の企画について。

9月12日(金) 10:30〜12:00
出席者:藤田義孝・戸次顕彰・松岡智美
場 所:真宗総合研究所
内 容:業務報告と今後の活動について。

〈大谷大学史資料室スポット展示関係の作業〉
7月15日(火) 10:30〜12:00
「「大谷大学」の誕生」展の撤収作業
参加者:戸次顕彰・松岡智美
場 所:大谷大学図書館入口展示スペース

〈その他〉
関西学院大学博物館開館セレモニーおよび内覧会への出席
日 時:9月28日(日)
場 所:関西学院大学
出席者:松岡智美

上記活動以外にも、大谷大学史資料室では大学史資料の調査・整理や、閲覧・質問等への対応を日常業務として行った。

また、大学内の刊行物の発行や保存の状況を調査するため、学内各部署にアンケートや聞き取り調査を行うなどの活動を行った。

さらに、藤田室長を中心に尋源館と旧本館の３Ｄ回転画像とペーパークラフトを作成・公開した。

デジタル・アーカイブ資料室

旧データベース班　横山写真館所蔵資料目録作成

６月25日(水)　10：00～12：00
場　所：響流館４階　会議室
内　容：旧データベース班による資料の写真データ、目録作成の進捗状況の確認と今後の作業方針ならびに計画の作成。資料を図書館倉庫から、真宗総合研究所内倉庫へ移動。

７月１日(火)　11：30～12：15
場　所：響流館４階　真宗総合研究所
内　容：今後の作業場所であるプロジェクト研究室ルームの清掃と資料の移動。

７月２日(水)　10：00～12：00
場　所：響流館４階　真宗総合研究所内プロジェクト研究室ルーム
内　容：資料のリストと現物の対照、確認。写真撮影。

７月９日(水)　10：00～12：00
場　所：響流館４階　真宗総合研究所内プロジェクト研究室ルーム
内　容：資料のリストと現物の対照、確認。目録作成準備。

７月16日(水)　10：00～12：00
場　所：響流館４階　真宗総合研究所内プロジェクト研究室ルーム
内　容：資料のリストと現物の対照、確認。目録作成準備。

７月23日(水)　10：00～12：00
場　所：響流館４階　真宗総合研究所内プロジェクト研究室ルーム
内　容：目録作成。ミーティング。

９月11日(木)　10：00～12：00
場　所：響流館４階　真宗総合研究所内プロジェクト研究室ルーム
内　容：目録作成。ミーティング。

９月18日(木)　17：00～19：00
場　所：響流館４階　真宗総合研究所内プロジェクト研究室ルーム
内　容：目録作成。

■人事

□特別研究員（2013年８月30日付）

＊古荘匡義
　現　　職　任期制助教
　研究期間：2013年８月30日～2015年３月31日（新規）
　研究課題：「宗教間体験の現象学」構築のための基礎的研究

＊木島菜菜子
　現　　職　任期制助教
　研究期間：2013年８月30日～2015年３月31日（新規）
　研究課題：ディケンズと絵画

□客員研究員（2014年７月１日付）

＊James C. Dobbins（オバーリン大学教授）
　研究期間：2014年７月１日～2015年７月31日（新規）
　研究課題：日本仏教美術における宗教的意義の研究

□研究員（2014年９月30日付解任）

＊福田洋一（西蔵文献研究）
＊武田和哉（西蔵文献研究）

研　究　所　報　第 65 号

2014年11月１日　発行
編集発行　大谷大学真宗総合研究所
〒603-8143　京都市北区小山上総町
Tel. 075-411-8498　Fax. 075-411-8435

©2014 Otani University Shin Buddhist Comprehensive Research Institute